

資料

(平成三十年十二月)

第六十三回「合宿教室」(西日本・東日本)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

公益社団法人

国民文化研究会

第六十三回 「合宿教室」 (西日本・東日本)全参加者の感想文と短歌詠草



西日本

「合宿教室」

と き 平成三十年八月二十四日(金) から二十六日(日) まで二泊三日間

ところ 福岡県糟屋郡篠栗町「福岡県立社会教育総合センター」

参加総数 五十三名

東日本

「合宿教室」

と き 平成三十年九月七日(金) から九日(日) まで二泊三日間

ところ 静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」

参加総数 六十三名



目次

「はしがき」に代へて……………	理事長 今林賢郁……………	3
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		6
「合宿教室」63年の歩み……………		8
西日本「合宿教室」……………		11
日程表（二泊三日）……………		12
あらまし……………		13
走り書きの「感想文」と第二回目の「短歌詠草」……………		23
合宿中に創作された「短歌詠草」……………		47
東日本「合宿教室」……………		55
日程表（二泊四日）……………		56
あらまし……………		57
走り書きの「感想文」と第二回目の「短歌詠草」……………		69
合宿中に創作された「短歌詠草」……………		101
あとがき……………		110
カメラ・レポート27枚（25〜45の奇数ページ、46ページ、71〜99の奇数ページに掲載）……………		

“はしがき”に代へて

公益社団法人 国民文化研究会 理事長

今 林 賢 郁

昭和三十一年（一九五六）に第一回が開催された当会の「全国学生青年合宿教室」は六十三回を迎へ、今年は「西日本」「東日本」の二ヶ所で開催致しました。「西日本」は、平成三十年（二〇一八）八月二十四日から二十六日までの二泊三日、厳しい暑さが続く中、福岡県篠栗町の「福岡県立社会教育総合センター」で開催、〃現代をより善く生きるために―人は後ろ向きに未来に入っていく―〃をテーマに掲げ、当会会員による講義と講義後の班別研修、参加者全員が創作した短歌の全体批評と班別相互批評に心身を傾けて取り組みました。以下、「東日本」も含めて合宿の概要を簡単に紹介します。

「自分を知りたいあなたへ―歴史が教へてくれるもの―」（奥島誠央氏）、「人はいつも過去に励まされてゐる―〃記憶〃があるから生きていける―」（廣木 寧氏）、「改革者の使命―芭蕉と子規―」（折田豊生氏）、「人から・家から・国から」（山口秀範氏）の四つの講義が行はれましたが、各講師はそれぞれの演題に添ひながら、自分を知るために歴史に学ぶことの大切さを、過去は記憶としていつも私たちを励ましてゐることを、情意が枯渇した今の時代に風雅の道に生きる意味は何かを、更には我が国の国がらについて、登壇した講師は講義のなかで福沢諭吉、松尾芭蕉と正岡子規、藤田東湖などを取りあげながら参加者に語りかけました。

この「合宿教室」の特色である、歴史に残されたすぐれた短歌を読み味はひ、参加者全員が少なくとも一首の歌をつくり、自分が詠んだ歌を他の参加者と相互に批評し合ふといふ日程は今年もまた東西共に組み込まれました。「短歌創作と相互批評」は、はじめ

て歌を詠む人はもとより創作経験のある人にとつても、自分が心に感じたことを正確に表現することの難しさと、推敲を重ねることで感じたことが正確に表現できたときのよろこびとを体感できる得難い経験になってゐます。

「西日本」に続いて開催された「東日本」では、九月七日から九日までの二泊三日、富士山の麓、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」で実施。あいにくの雨模様で霊峰富士を見ることも叶はず終了かと懸念されましたが、最終日には次第に雲が切れて富士の雄姿を仰ぐことができたのは有り難いことでした。

「富士の麓で「日本の心」を学ぶ」をテーマにした「東日本」では、招聘講師として江崎道朗先生をお招きし、「日米同盟の行方と中国への姿勢」の演題でご講義をいただきました。先生は冒頭、大学時代にこの合宿教室に参加して小柳陽太郎先生、山田輝彦先生に出会ふ機会に恵まれ、学問の根幹は

他人の心の動きを正確に理解し受け止める力を養ふものでなければならぬこと、人を説得するためにはどんな見識をもたなければならぬかを教へていただいた。それ以来マスコミを批判するだけでなく、どうすれば日本を良くすることが出来るかに心を砕いてきた、とこれまでのご自身の学問の跡を振り返りながら本題に入っていました。トランプ政権が進める対北朝鮮政策についての四つの課題（オバマリスク、韓国リスク、中国リスク、日本リスク）についてそれぞれ言及され、トランプ大統領は経済の締め付けで中国の軍拡を阻止しようとしてゐるが、このことを日本のメディアは正確に理解してゐない。軍事が成り立つには経済とインテリジェンスが重要で、日本は日米の連携でアジアの自由をどう守るのが問はれてゐるのだと本質を把握することの大切さを指摘されました。

この他に当会会員による三つの講義、「日本のこころ」「古事記」「國武忠彦氏」、「聖徳太子の御言葉に触れて―憲法十七条を中心に―」（原川猛雄氏）、「日本の国柄―明治百五十年に思ふ―」（青山直幸氏）が行はれました。古事記冒頭の神々の名の由来に触れながら、古代人の心の中に神々が生きた存在であつたことを、聖徳太子の「十七条憲法」には人間らしく生きる道―「他と共なる生」

を願はれた太子のお心が示されてゐることを、そして孝明天皇、五箇条の御誓文、昭和天皇のご足跡に触れながら日本の国柄の内裏を、登壇した講師は心を込めてそれぞれの講義を展開しました。

当会の合宿教室が目指すものは、次代を担ふ学生青年層が自国の歴史を正しく知り、知ること、自国への自信と愛着を胸に湛へながら堂々と世界に羽ばたいて欲しい、その糸口をこの研修の場が提供出来ればとの思ひから六十三年に亘って合宿教室を続けて参りました。今年の合宿教室でも主催者と参加者が心をひとつにして取り組んだ結果、参加者の心の中に自分が日本人であることの自覚や自国の現状と克服すべき課題などが次第に感じ取られていったやうに思はれます。

この「感想文集」は合宿最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意を尽くしたものではありませんが、懸命に取り組んだ日程最終日の率直な思ひを書き留めてくれたものです。こ精読戴ければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に替り心から厚く御礼申し上げます。

尚、来夏の「第六十四回合宿教室」は、来年の八月末から九月初旬の二泊三日、関東地区での開催を最優先として検討中です。決定次第、機関誌「国民同胞」でお知らせ致します。



第 63 回全国学生青年合宿教室 (西日本) (平成 30 年 8 月 24 日～26 日)
於「福岡県立社会教育総合センター」

西日本「合宿教室」参加者

(学生班) (算用数字は参加学生数)

神奈川県 1 広島修道大学 1

福岡工業大学 短期 1

福岡大学 4 中村学園大学 1

計 八名 (うち女子一名)

(社会人参加者) 十二名 (うち女子四名)

(国民文化研究会) 三十二名

(事務局) 一名

総計 五十三名



第63回全国学生青年合宿教室（東日本）（平成30年9月7日～9日）
於「国立中央青少年交流の家」

東日本「合宿教室」参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東京大学1 信州大学1 明治大学1

佐賀大学2 皇學館大学1 福岡教育大学2

筑波大学大学院1 長崎大学2

Charterhouse School1

計 十二名（うち女子三名）

（社会人参加者） 十一名（うち女子七名）

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 三十八名

（事務局） 一名

総計 六十三名

— 「合宿教室」63年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
46	" 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	" 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	" 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	" 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	" 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	" 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	" 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	" 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	" 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギャルボ・占部賢志
55	" 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	" 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	" 24年	阿 蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	" 25年	厚 木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
59	" 26年	淡 路	108	中西輝政・小柳左門
60	" 27年	富 士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫
61	" 28年	福 岡	74	今林賢郁
		富 士	69	石平・今林賢郁
62	" 29年	福 岡	83	山内健生
63	" 30 年	福 岡	53	折田豊生・山口秀範
		富 士	63	江崎道朗・青山直幸
累計・参加人数			15,	158名

西日本「合宿教室」



第63回 全国学生青年合宿教室(西日本) 日程表

8月24日 (金)

8月25日 (土)

8月26日 (日)

6:30		起床・洗面	起床・洗面	6:30
7:00		朝の集い(合宿教室)	朝の集い(合宿教室)	7:00
		朝の集い(総合センター)	朝の集い(総合センター)	7:30
		朝食	朝食	
8:30		講義 「人はいつも過去に励まされている」 廣木寧氏	創作短歌全体批評 小柳志乃夫氏	8:30
		班別研修	班別相互批評	9:15
10:00				
11:30		短歌創作導入講義 北村公一氏	昼食	11:30
12:30		(写真撮影) 車中昼食(弁当)	講義 「人がら、家がら、国がら」 山口秀範氏	12:30
		レクレーション	班別研修	14:00
		(短歌創作)	移動	15:20
		[短歌提出]	講話 小野吉宣氏	15:30
	夕食は済ませてくること	夕べの集い	感想文	15:50
17:15			閉会式	16:30
18:00	(18:00受付開始)	夕食	解散	17:00
	(各教室にて待機)	入浴		
19:00	開会式	休憩		
19:30	合宿導入講義 「自分を知りたいあなたへ」 與島誠央氏	古典講義 「改革者の使命 -芭蕉と子規-」 折田豊生氏		19:30
20:30	班別研修	班別研修		21:00
22:00	(入浴)			
22:30	就寝	就寝		22:30

第六十三回「合宿教室」(西日本)のあらまし

第一日目 (八月二十四日・金曜日)

第六十三回全国学生青年合宿教室(西日本)は、福岡県糟屋郡の「福岡県立社会教育総合センター」にて開催された。参加者は、北は東京、南は鹿児島から集った。

開会式

合宿教室(西日本)は福岡大学経済学部二年笠原康嗣君の開会宣言で幕を開けた。主催者代表挨拶で今林賢郁国文研理事長は、「古典を繙くと私たちの先人がどのやうなことに生きがひを覚えて、どんな事柄に価値を見出してきたのかといふことが分る。『日本』の思想に触れることになる。古典の言葉や先人の生き方には、日本人らしい日本人になるためには、どのやうなことを心がければ良いのかといふことが示されてゐる。この合宿で先人の言葉に触れることによって、今後の生き方を考へる契機として欲しい。大いに学び、かつ楽しい三日間にしてもらひたい」と述べた。

次いで、来賓の福岡県議会議員古川忠先生からは、「読書が人生を豊かにし、書くことで確実な人生を歩むことができる。友と本当に腹を割つて話をすれば、そこに新しい信頼が生れる。そのやうな勉強をこの合宿を通してやっていただきたい」との激励の御挨拶をいただいた。

合宿導入講義 「自分を知りたいあなたへ——歴史が教へてくれるもの——」

福岡県立筑紫中央高等学校教諭 與島 誠 央氏



教師初任の頃、生徒の発した「先生、こんな昔のことを勉強して何の役に立つん？（何の役に立つのか）」といふ問ひに出会ったことがある。この質問は教師生活三十年間、折々に脳裡に浮んで来た。今日はこの質問への答へのつもりで語りたい。

先の大戦で満洲に出征した父は南京で敗戦を迎へた。その際部隊は自決を決めてみたが、その部隊を前にして隊長は、「この部隊の敗戦の責任は自分が取る。諸君は祖国に帰れ。どうしても死ぬといふのなら先祖の墓の前で死ぬ」と言つて自らはピストルで自決した。父達は死ぬに死ぬに復員して、その後父は母と結婚。私達兄弟が生まれた。歴史は命のつながりであつて、自分を知りたいのなら歴史に学ばなければならない。

歴史に学ぶには遺された「言葉」に迫ることである。吉田松陰の『講孟餘話』に触れながら、歴史を学ぶ意義について語りたい。（この後学生時代からの読書体験を踏まへて、松陰の生涯と思想をたどりつつ歴史に学ぶ意味合ひについて述べられた）。

講義終了後参加者は各教室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら講師の最も伝へたかったこと重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合つた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせみか始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目 (八月二十五日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。朝の清々しい空気を胸一杯に吸ひながら体操を行ひ、その後、森田仁士氏による唱歌の歌唱指導を受け、皆で合唱した。唱歌は次の通りである。

二日目 (八月二十五日) 「村の鍛冶屋」

三日目 (八月二十六日) 「埴生の宿」

講義 「人はいつも過去に励まされてゐる——“記憶”があるから生きていける——」

(株) 寺子屋モデル 廣木 寧氏



昨年ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ氏は、五歳で英国に渡り二十四歳の時に作家を志して、短篇小説をいくつか書き上げたが、満足ができない。その時に突如、同氏に蘇ったのは一度も帰国したことがない“日本”の記憶であったといふ。このやうに、過去は記憶として現在の私たちを励まし、未来を囑望させるのだ。

洋学の重要性を知つてゐたから福澤諭吉は、杉田玄白（文化十四年、一八一七年歿）の『蘭学事始』を初めて刊行した。この書物は近代日本の出発が明治のずっと前から胎動してゐたことを示すもので、そこには洋学受容の苦闘のさまが記されてゐる。諭吉の『瘡我慢やせがまんの説』は、幕府の要職にあつた勝海舟が官軍と戦はずして江戸城を開城したこと、明治新政府の高官に上つたことへの疑念を問ふもので、波紋を呼んだ。諭吉の疑念には賛否の声が起つたが、人の誤つた記憶も明らかになつた。文筆に生きた諭吉の仕事は世人の認識の誤りを正すことにあつた。誤つたことが世に流布することを質たがすことにあつた。

イシグロ氏の作品の中に「過去を語り合うことに意味が見出されない」といふ一文がある。それは「人が記憶をなくしている」、あるいは忘れさせられてゐることから生じてゐる。だからこそ、今日は過去をかたる喜び、そして過去を記憶しておくといふ使命があるのである。

短歌創作導入講義

税理士法人あおぞら 北村 公一氏



短歌を詠むことは「心情、感情の洗練」、言ひ換へれば心を磨くことである。自分の心を見つめ、それにふさはしい正確で適切な言葉を探すことが心を磨くことにつながる。それは昔から先人たちが実践してきた「しきしまの道」を私たちも踏み行ふことでもある。

本会の大先輩に廣瀬誠先生といふ方がをられる（平成十七年歿）。少年時代から万葉集に親しまれた廣瀬先生は、富山県立図書館に勤務されてゐて、昭和五十一年には皇太子同妃両殿下の御前で立山の歴史をご説明申し上げる榮譽に浴されてゐる方だが、その後舌癌に罹られる。その闘病中の詠草集『坂の沼琴』には、「天地のまにまにわれはわが生を生きむとぞ思ふ力のかぎり」といふ闘病へのご決意のお歌をはじめ、手術後はリハビリの中で万葉集を誦み上げられるが、「万葉歌力の限り誦みゆけどふしぶし声はとぎれて続かず」「とぎれつつわれは誦みゆく声かぎりわれは誦みゆく万葉の歌」等々と苦しい闘病生活の様子をそのまま詠まれたお歌が収められてゐる。

このやうに短歌は手慰みものではなく、自らの心を見つめるところから詠まれるものである。次のレクレーションでは見たまま感じたままを飾ることなく短歌に詠んで欲しい。

レクレーション（短歌創作）

短歌創作を兼ねたレクレーションの最初の見学地は、飯塚市の旧伊藤伝右衛門邸であつた。明治から昭和にかけて殖産興業の礎となつた石炭。その産出地として栄えた筑豊で炭鉱王と呼ばれた人物の邸宅である。地元のボランティアの方々の説明を聴きつつ、大正初期に建てられた和風ながらも一部に洋室も取り入れた和洋折衷の広い屋敷を巡つた。室内から見た庭園の美しさは、しばし暑さを忘れさせてくれるほどだつた。

次に篠栗町に戻つて南蔵院を訪ねた。篠栗の地は、四国霊場に修行した僧がこの地の疫病退散の祈禱を行つて以来、霊場となつた所である。近年、ブロンズ製の巨大な釈迦涅槃像が開眼され、この地のシンボルとなつてゐる。初めて訪れた我々は、像の巨大さと不思議な明るい印象に驚きながら、楽しいひと時を過した。

公益社団法人 国民文化研究会 参与 折田 豊生氏



俳句は短歌とともに民族の貴重な文化遺産であり、俳句を学ぶことは短歌を学ぶ上でも極めて有益である。和歌、連歌、俳諧連歌、発句、俳句の歴史を踏まへて、松尾芭蕉と正岡子規それぞれの改革の取組みを考へてみたい。

風雅の道を求めるには和歌が断然有利であるにも拘らず、なぜ芭蕉は俳諧連歌を選んだのか、また正岡子規の俳句・短歌革新は、西欧化一辺倒の時代だったが、なぜ伝統文化の再構築を課題としたのか。

芭蕉は、禅や老荘思想を学び、実人生を肯定しながら自然に随順して生きるなかで、「座の文芸」である俳諧連歌（連句）を通して多くの門人達と交流し、「精神の態度」を重視する蕉風と呼ばれる独特の俳諧を確立した。それはまさに、聖徳太子の「世俗の中の出家」に通底するものであったと言へよう。また、子規は、西欧文化が激しく流入してくるなかで、惰眠を貪るがごとき宗匠俳諧と古今和歌集を崇拜し旧態然として省みない流派歌壇に対し、その低俗の惰性を覚醒せしめべく果敢に闘ひを挑んだ。それは、一方で病魔とも闘はなければならなかった青年の、不撓不屈の信念による決死の事業だった。子規は、高浜虚子をはじめ多くの門人を得たが、終始孤高の道を自ら歩むこととなった。

芭蕉と子規は、共に高い理想を抱き、無欲で権威に盲従せず、絶命の間際まで細き一筋の「ミチ」を追求した。さらに特筆すべきは、志の大きさが他を圧して際立ってゐたことである。その過酷な使命はいったい誰が与へたものなのか。また今日の情意が枯渇した時代に、風雅の道に生きる意味とは何かを問はねばならない。「文化の戦士たれ」と呼びかけたい。

創作短歌全体批評

I B J L 東芝リース(株) 小柳 志乃 夫氏



験して欲しい。

(この後、各班から一名づつ参加者の作品を取り上げ、作者の感動のポイントを押さへるとともに、一首一文といふ原則に照らしつつ表現を整へていった。その中で、「日本のこころ」といった抽象的・概括的な表現はなるべく避けるべきで、むしろ具体的な感動を注視する中に「日本のこころ」が自づと表現されるのではないかとの指摘がなされた)。

短歌を創作することで、音律や仮名遣ひをまもることは文化の継承に他ならないことであり、また短歌の創作を通じて多くの先人の詠んだ歌を味はふ道が開けることになる。是非いい歌を声を出して読み、覚えて、五・七・五・七・七のリズムに親しんでほしい。特に明治天皇の御製拝誦をお勧めしたい。

昨日は猛暑の中の短歌創作であったが、参加者全員が歌を詠んだといふことは大変なことで、有り難いことであった。短歌の相互批評の時間は、この合宿教室で最も楽しい時間になるはずで、短歌創作導入講義で紹介された廣瀬誠先生に「一人一人の短歌をめぐりよき意見次々にいで座ははづみつつ」といふ歌があるし、必携書である『短歌のすすめ』の著者夜久正雄先生は「おたがひにうたのあやまちただしつとなごむ心よ何にたとへむ」といふやうに詠まれてゐる。短歌の相互批評は、作者の気持ちを憶念し、皆で協力してその心に沿つた表現を求める作業であり、心と言葉が一致した時に沸いてくる喜びを是非とも体

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝へることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

講義 「人がら・家がら・国がら」

(株) 寺子屋モデル代表 山口 秀範氏

江戸末期の同時代を生きた三人、二宮尊徳の道歌からは「人がら」、飯田新七(高島屋の創業者)の家訓からは「家がら」、そして藤田東湖の遺した著述からは「人がら、家がら」のみならず「国がら」をも窺ひ知ることが出来る。



東湖作の「回天詩史」には、自身の三十九歳までの生き様・気概と、逆境に挫けない信念が詠はれてゐるが、そこに父・藤田幽谷の強い影響が見て取れる。水戸城下の古着屋に生れた幽谷は、圧倒的な学問の才で士分へと栄進。その幽谷が十八歳の時に著した『正名論』で、我が国における唯一の「王」は「真天子(天皇)」であると論じた。このやうな水戸藩の国家観は、第二代藩主の徳川光圀に起源を持つもので、司馬遷の『史記』列伝第一の「伯夷叔斉」を読みつつ、禅譲・放伐の帝位の変遷、こと放伐が現代まで正当化され、漢民族の地で古代より繰り広げられた王朝の転変の歴史こそ、彼らの「国がら」と言つていい。

続いて西洋諸国の「国がら」の典型は、アメリカ合衆国の「独立宣言」に読みとれる。アメリカ人が最も大切に守らうとする「生命、自由、および幸福追求の権利」は、実は「Creator」―創造主、つまり全知全能のGOD―によつて保証されてゐるものである。さらに、多くのイスラム諸国の「国がら」は唯一絶対神、アラーへの忠誠と同義で、二十一世紀のグローバル世界にあっ

ても、各民族の千年、二千年前の歴史が「国がら」を決定してゐる。

それでは我が国の「国がら」はどうか。『日本書紀』の「天壤無窮の神勅」と「神武天皇の建国の詔」に我が国の「国がら」が示されてゐる。そしてそのご精神は歴代天皇方に連綿と受け継がれて平成の御代の現在に至つてゐる。御歴代の御製に触れて、それを確認して欲しい。

講話 「謝恩の碑について——筑豊炭田と朝鮮人労働者たち——」

元福岡県立直方高等学校教諭 小野 吉宣氏



参加者の皆さんには福岡県宮若市内に建つ二つの碑、「俵口和一郎頌徳碑」（昭和四年除幕）と、「謝恩碑」（昭和十年除幕）を実地に見て貰ひたい。

「頌徳」とは徳を頌へる（徳を誉めたたへる）ことで、貝島炭鉱の炭鉱長であつた俵口和一郎の退職に際して、その下で働いてゐた朝鮮人労働者が仲間と呼び掛けて建てたものが俵口和一郎頌徳碑である。また「謝恩」とは受けた恩に対する感謝の気持ちを表すことだが、昭和十年、露天掘りの炭量が減少したことで貝島炭鉱が閉山することになった。その時、やはり朝鮮人労働者が二十年あまりお世話になつたとして浄財を集めて建てたものが謝恩碑である。

当時の炭坑で働いた人達の大変素晴らしい善意が結晶した記念碑である。ところがことに近年珍妙な（意図的な）強制労働説が国際社会で流布されてゐるが、必ずしも政府外務省は適切に対処してゐない。しかしそこには建碑に尽力した朝鮮人の名前も刻まれてゐるのだ。本来であれば日韓の友好親善の原動力となるべきものであつて、さうなることを強く願つてゐる。

閉会式

主催者を代表して小柳志乃夫国文研副理事長は、講話を担当された小野吉宣氏の思ひのこもつた言葉、また自身が担当した創

作短歌全体批評など合宿教室の全体を振り返って、「自分の素直な気持ちや思ひをきちんと言葉にすることは大切なことであるが、普段の生活では中々気付く機会が少ない。参加者の皆さんには、この合宿教室が言葉を大切にしていることの意味合ひを感じ取って頂けたのではないかと思ふ。『学問といふ一つの道』に連なりたいと願ってゐる一人として、これからも皆さんと共に精進して行きたい」と挨拶した。

そして、福岡大学経済学部三年西田忠正君による閉会宣言を以て、合宿教室（西日本）は幕を閉じた。

合宿運営

【本部】

運営委員長

(株)寺子屋モデル

I B J L 東芝リース(株)

(株)ミユキコーポレーション

廣木 寧

小柳志乃夫

吉村 浩之

【指揮班】

指揮班長

朝倉公共職業安定所

医療法人豊司会 新門司病院

元(株)アルバック

H u b a x (株)

古川 広治

森田 仁士

北濱 道

岡部 智哉

【事務局】

事務局長

国民文化研究会事務局長

(株)ラック

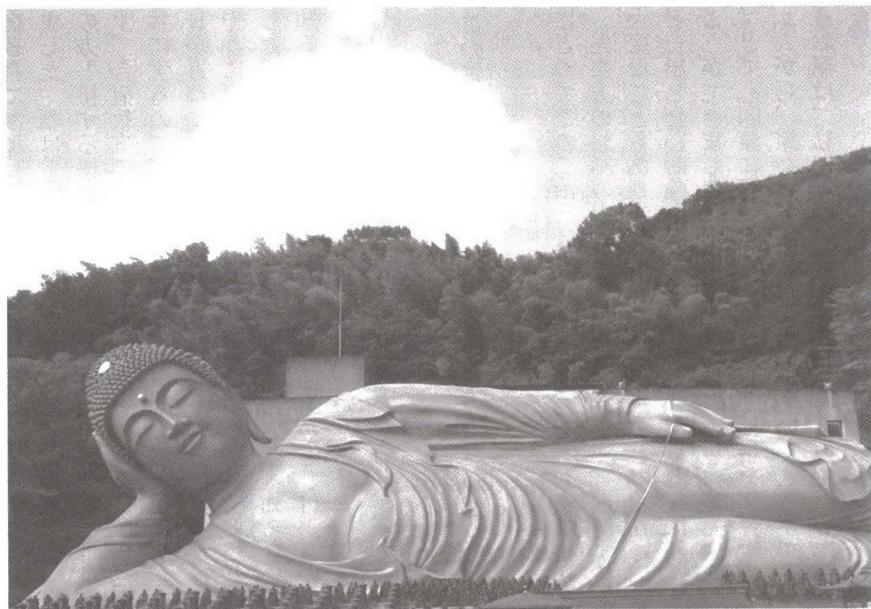
磯貝 保博

栗方惠美子

高橋俊太郎

走り書きの感想文

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、二泊三日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。



第一班

講義内容の全てが深い意味を持ち、興味が尽きなかった

(福岡大学 経 一年 桃崎善希)

合宿教室に参加して、得るものが沢山ありました。講義で話される内容全てが深い意味を持っていて、興味尽きることなく、楽しく聞くことができたし、ただ本を読んでは分からないであろう事が理解できたと思います。また、合宿教室で集まった色々な年齢の方に自分の疑問をぶつけ、難しくはありましたが、貴重な話を聞きました。今も、先人の話を全て理解したとは言えません。ですので、これからは、話されたことを日常生活を送る中でゆっくりと理解したいと思っています。講義の話以外にも合宿教室で学ぶ事がありました。違う学校、違う年齢の方々と話し合うことで、自分と違った価値観に気づき、人の意見を尊重しつつ、自分の意見を伝えられるようになったと思います。

合宿の夜の暑さがすさまじく止まることなきベタつく汗よ

一歩成長出来たが、まだ勉強しなければならない

(福岡大学 経 一年 平川龍也)

合宿教室に参加したことで、社会人の方と交流することが出来ました。私は普段、学校を中心に生活してゐるので、社会人の方と接する機会は少なく、学生同士で行動する事が多いです。合宿教室では、社会人の方と一緒に勉強したり、寝食を共にするので、初めは戸惑ふ事もありました。しかし、最終日が近づくにつれて、自分から社会人の方に声をかけられるやうにもなり、自分の中で一歩成長する事が出来たと感じました。また、社会人の方の話を聞くことで、知らないことも知ることが出来たのですが、まだ知識が追いつかないところもあつたので、勉強しないといけないと思ひました。若杉の山のふもとで汗流しともに学べる友を得しかな

この二泊三日はとても意義あるものになった

(福岡工業大学 短期 一年 井野口祐樹)

私にとってこの二泊三日は、とても意義あるものになりました。先生方のお話の中には難しい内容も多く、理解することが大変なこともありましたが、班別研修などでお互いに意見などを出し合い討論をすることで、より深く内容に入っていくことができました。中でも、三日目の山口秀範先生のお話は、とても印象に残っています。古典や神話を学習することと「人から、家から、国から」に触れていくことができるというお話は、私にとって非常に新鮮な考え方で、心に残りました。

二日目に行った短歌創作では、短文で表現する難しさを痛感しながらも、日本語の美しさを認識し、自身の心情を素直に表現する喜びを発見することが出来ました。

また、この合宿を通じて、新たな友との出会いもありました。友と協力し合い、互いに学ぶ三日間に出ることが出来たと思っっています。この合宿で古典や和歌などを学んだことが、これから日本の文化について学んでいくきっかけになればと考えています。

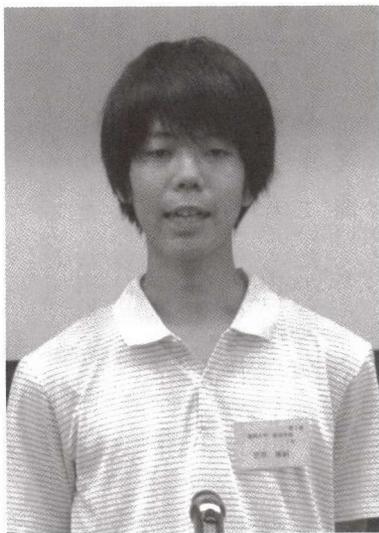
合宿で古典に学び歌にふれ先人たちを誇りに思ふ

共に生活したことは一生忘れられない

(福岡大学 経 二年 笠原康嗣)

今回初めてこの合宿に参加させて頂いて、まず開会式の宣言をさせて頂きました。かなり緊張しましたが、無事宣言できて良かったです。今までこういった宣言などはしたことがなかったのですが、貴重な体験になりました。また自分の中で結構大きな出来事だったのが、同じ部屋で初めての他の大学の方と過ごしたことです。初めは緊張して上手く話せなかったりしましたが、同じ風呂に入ったり、共に食事をする事で本当に仲良くなれました。沢山の講義をして頂いて、歴史や短歌の知識を増やすことも出来ましたが、こういった生活面での取り組みが僕はすごく印象に残っていて、一生忘れないだろうなと思います。ただ、冷房の効く時間が短くて、朝は

カメラ・レポート1



開会式。福岡大学経済学部二年笠原康嗣君(右)の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長(左)は、「この合宿で先人の言葉に触れることによって、今後の生き方を考へる契機として欲しい」と挨拶した。

バテバテでした。二日目にレクリエーションで涅槃像などがある所に行ったのですが、そこを出るときに買った篠栗のTシャツのデザインが思った以上に良くて気に入りました。これからも使っていきたいです。準備、暑さ、寝不足など大変なこともありましたが、食事も美味しくて思い出も残せて満足です。これからの大学生活の糧にしていけたらなと思います。

レクリエーションで出かけし折

振り返り心の熱を思ひ出し車窓で感じる風がひんやり

留学する前に日本の文化を学べて本当に良かった

(神奈川県 人間科学 三年 中尾創哉)

今回の合宿教室は、父からの勧めで初めて参加させて頂きました。私事ですが、来年より留学することになっており、留学する前に日本のことを知っておいた方が良いと思つて参加しました。

いざ参加し、講義を受けてみると自分の知らなかった事が沢山あり、日本人としてもっと日本のことに注目して学んでいかなければならないと痛感しました。また、同世代の学生たちと二泊三日共に学び、共に暮らすということは、とても良い刺激となりましたし、良い仲間が出来たことに感謝です。その中でも特に感じたことは、短歌は人柄を表すということです。講義の中で偉人達の短歌に触れ、短歌創作で友人達

の心に触れました。たった「五・七・五・七・七」しかない限られた世界で、人が感じたことをこんなにも多く伝えることが出来るのだと感動を覚えました。今後は自分の感じたことで短歌を詠み、自分の感性を磨いていきたいと思えます。留学をする前に日本の文化を学ぶ事が出来て本当に良かったです。日本人としての誇りを持って生きていくことが出来るように今後も勉学に励みたいと思えます。

よく学びよく笑ひたる友たちとまた会ふ日まで日々励まなむ

歴史や古典を鵜呑みにせずに批評していきたい

(福岡大学 経 三年 西田忠正)

歴史や古典を鵜呑みにせずに絶えず批評する重要性とその難しさを学びました。吉田松陰先生曰く「経書を読むの第一義は聖賢に阿らぬこと要なり」はつきり言つて私はこの言葉に驚きました。私の考えでは、孔子や孟子など、時代をこえて受け継がれる書物を批評することはあり得ないからです。なぜなら数百年、数千年のあいだにこれらの書物は絶えず批評されており、それでも内容が素晴らしいため現代まで親しまれていると思つていたからです。

しかし、講義を聞いて考えに変化が起きました。鵜呑みにするのは、その人物の考えに隷属することと同意義であると分かったからです。偉人の文章を批評することはとても難しいですが、少しずつやってみようと思えます。

この合宿で取り扱う日本や中国の古典は高度である

(広島修道大学 法 四年 田中壯卓)

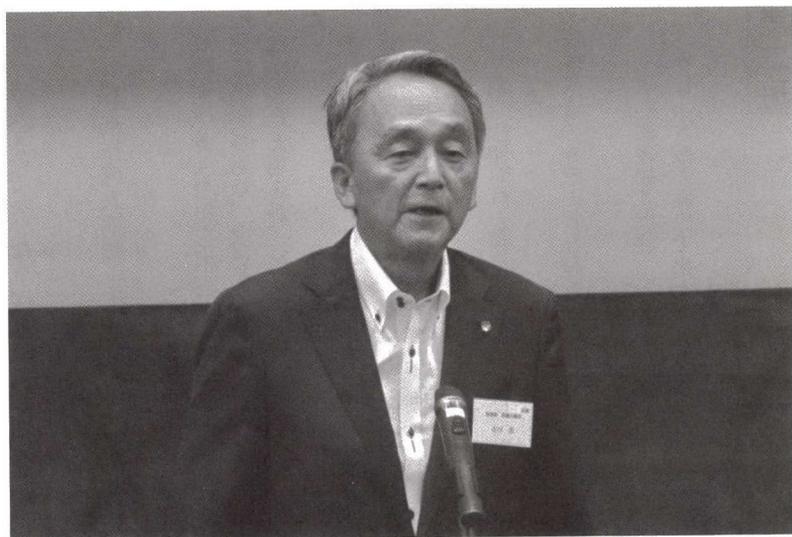
今回は、私にとつては昨年に引き続き二度目の参加であり、また東西分かれて開催される形としては初めての参加でありました。

ご講義では、山口秀範先生のお話が大変印象に残りました。「伯夷・叔齊」の例を見て、藤田東湖や水戸光圀らが、中国における政治の失敗を踏まえ、日本の皇室を存続させるために知恵を絞っており、多くの先人の努力によって、今日まで皇統が続いていることを知り、感謝の念を抱きました

普段参加している学生向けの合宿では、憲法や大東亜戦争など、比較的分かりやすい、悪くいえば単純なテーマを取り扱うことが多いのですが、この合宿では、福沢諭吉や松尾芭蕉、正岡子規、また日本や中国の古典など、素材として高度なものが資料に含まれ、予備知識が乏しい自分にとつては、なかなか理解が困難なものも多くなりましたが、合宿が終わった後も、これらに触れていきたいと思えます。

南蔵院の防人の碑文を見し折に

国がため命尽くしし人々を忘るるなかれと碑文は教ふ



開会式。来賓の福岡県議會議員 古川忠氏は「読書が人生を豊かにし、書くことで確実な人生を歩むことができる。友と本当に腹を割って話をすれば、そこに新しい信頼が生れる。そのやうな勉強をこの合宿を通してやっていただきたい」と激励された。

第一班のユニークな班員に感謝してゐます

(福岡県立筑紫中央高等学校教諭 與島誠史)

合宿では導入講義と一班の班長を担当させてもらひました。導入講義では、歴史の声に耳を澄ませようといふ事が一番伝へたかつたのですが、時間に追はれ、意図を十分伝へきれず、各班の研修に迷惑をかけてしまつたと反省してをります。

一班の班員は、ユニークなメンバーに恵まれました。班付の北村公二君、常に落ち着いて班長をサポートしてくれ、助かりました。井野口祐樹君、いつも穏やかに癒やしてくれた。桃崎善希君、最初はちよつと軽いのかと思つてゐたけれど、古風な感性を持つ純情青年だつた。笠原康嗣君、南蔵院の少女キヤラTシャツがよく似合ふ、女子力高めの優しい子。中尾創哉君、横浜育ちの君が篠栗の空は広いと言つた、三首連作が生まれたね。平川龍也君、君の歌の「リンドウ」についての話は圧巻だつた。柳原白蓮の生涯と共に、是非大学に帰つて皆に話して欲しい。西田忠正君、再会だね。気配りが出来てきたかな。短歌はまだまだ勉強しなさい。田中壮卓君、全体批評で短歌を取り上げられ、いい思ひ出が出来たね。みんなありがたう。のびのびと班長させて貰ひ感謝してゐます。

閉会の時近づきて感想をしたたむる班友見るにともしも

南蔵院涅槃のみ仏に習ひつつ皆で寝転び写し絵とりぬ

写し絵のポーズ勝手に決められたれど笑みて従ふ友ら愛らし

折々の笑まひ語らひ仕草なぞ思ひ浮かび来一班や良し

短歌創作導入講義を担当し大変勉強になつた

(税理士法人あおぞら 北村公二)

短歌創作導入講義を担当させて頂いた。講義の内容、時間配分に課題があり、求められてゐるレヴェルに達するものはなかつたと思ふが、種々のご指摘を頂き、大変勉強になつた。

また、第一班の班付をさせて頂き、班長の與島さんの班別研修の進め方、班員へのアプローチの仕方など、貴重な学びの機会を与へて頂き、感謝いたします。

講義前夜

灯り消し眼閉ぢれど様々の思ひ浮かびてなかなか眠れず

当日

廣瀬大人のみ歌の数々誦みゆけり聴きたる友らの心に届

けと

班別短歌相互批評

次々によき歌の案出で来たり詠みたる友の心推りて

第二班

日本の国、国柄について日常では考えないことを学んだ

(中村学園大学 教 三年 日野ゆかり)

この合宿を知ったのは大学からの案内で、初めはどんなことをするのか見当がつかず、少し抵抗感がありました。しかし、実際に参加してみると、日本の国について、国柄、日本人についてなど日常では考えないことについて、班の皆さんと議論し、自分の行動を見直さないといけないと感じて、とても自分のためになったと思います。初めての参加ということもあって、内容についていくのが必死で、話を深めるという所まではなかなか行けませんでしたが、しかし、今まで知らなかった言葉や歴史、語源などたくさんのが学べて、自分の引き出しを増やすことができました。

先人の大和魂これ学び我振り返り心に刻む

教わることのなかったことを沢山教えていただいた

(学) 中村学園 松村沙織

会場に着くまで不安ばかりでした。二泊三日の合宿を終えて、知識不足、勉強不足は事前の不安とおり痛感したところですが、今まで教わることのなかったことを沢山教えていただきました。合宿のサブタイトルであった「人は後ろ向きに未来に入っていく」について合宿前はイメージするのが難しかったのですが、少し理解できた気がします。「過去に学ぶ」



合宿導入講義。福岡県立筑紫中央高等学校教諭 與島誠央氏は、「歴史に学ぶには遺された『言葉』に迫ることである」として吉田松陰の『講孟餘話』に触れながらその人生を偲んでゆかれた。

カメラ・レポート3

ということから、私がどれだけ的事を受け止めることができているのか分かりませんが、受け止めた事をどう未来につないでいくのが大事なことだと感じています。

毎年海外旅行をしますが、その度に自身の日本人としての自覚の低さや自国についての知識のなさに恥ずかしさを覚えながら、それを克服しようともせずにあります。必要性を感じながらも、日々の忙しさを言い訳に最初の一步を踏み出していなかったのだと思います。今回の合宿をきっかけに日本の歴史を引き続き学んでいきたいと思えます。

講義聴き班で深めたこの学び心に刻み明日に繋げん

社会全体をどう幸せにできるか、そのヒントが
先人たちの言葉に隠されている

(株) カウテレビジョン 小川雅裕

二泊三日は長いようで短い時間であったが、その中で卒業以来、十数年ぶりに、古文や短歌など先人たちが遺してくれた様々な知見や教え、作品に触れた。その体験は、私が過去に触れた体験、学生時代のものよりも、非常に濃密で、学びの多いものだったように思う。それは、この日のために講義を準備して下さった先輩方のおかげというのほもちろんだが、学生時代と異なり、今、私が社会に出て、社会に生きていくという私自身の環境の変化も大きな理由の一つだと思う。

吉田松陰の講義において、「経書を読むの第一義は、聖賢に

阿らぬこと要なり」とあり、正岡子規が芭蕉を崇める人たちが古今和歌集を一番とする人たちを批評したように、私はこうした先人たちの大いなる知見に学ばせて頂きながらも、自分の脳で、頭で、しっかりと考えて、盲目的にならずに、そうした言葉と向き合っていきたいと感じた。今、この時を生きる私にとっては、今のこの生をどう幸せに生きるか、そして私の周りの友人、ひいては社会全体をどう幸せにできるかが最も重要で大切なことだ。そのヒントが、日本の先人たちの生き様や言葉にふんだんに隠されているという気付きを得たことが、今回の合宿での一番大きな収穫かもしれない。

先人の教へに学び我気付く幸せの種は足下にありと

講義のあとの班別研修で理解を深めることができた

(二社) 福岡中小企業経営者協会 大慈彌祐子

初めて参加しました。数ヶ月前から勤務先で、短歌にふれたり吉田松陰について学び始めたところで、正直、日本の歴史に関する知識が浅い状態でした。三日間の講義内容は、このような私にとって、全て新鮮であり、興味深いものでした。

歴史の見え方や見方が少し変わったような気がします。特に福沢諭吉「瘠我慢の説」については、講義及びその後の班別研修において、理解を深めることができました。講義内容に理解が追いつかず、納得できない部分を班別研修で意見交換することで、文章の中身が見えてくることが多く、班の皆様

に助けていただきました。

「過去を自分からつかみに行かないといけない」というメッセージをいただき、これからの人生において、歴史を学ぶ姿勢を大事に、忘れずにいたいと思います。

先人の思ひを友と語り合ひ我人生の糧とするべし

自分の矜持を基に世の中を変える存在になりたい

(株) グランドビジョン 河野最之

「日本の歴史を学び、学んだことを今後の人生に活かす！」という目的で参加させて頂きました。

どの先人も想いや誇りを大切にし、それを貫き通し日本を変革、継承してきたと学び、私も自分の矜持を基に世の中を変える存在になりたいと思いました。

先人の使命にふれる合宿で新たな夢をふくらませたり

いかに自分が閉じた世界にいるかを痛感した

(株) グランドビジョン 川西 潤

此度合宿に参加させて頂いたとき、本当によい「刺激」になりました。正岡子規の話や和歌の創作において、決して普段触れることのないものに触れ、その生き様を心から理解しようと思いを悩ませ、正確に、そして美しく自分の感情を示す言葉を探り出そうと考えました。それを友人と共有する過程も

カメラ・レポート4



班別研修。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと重要なことを確認し、感想を話し合った。

含めて、いかに自分が閉じた世界にいるかを痛感すると同時に、有意義で刺激的な時間を過ごしました。

以上の感想とは別に思ったことがあります。これらの内容を大学生や社会人等、若い世代に知ってもらいたいということでしたが、若い世代に限らずあらゆる年代の人を目標にするべきです。この内容は日本人が一生を通じて学んでいくものと思います。また講義の「進め方」、講師の「話し方」、そういう送る側の技法ももつと磨いた方がいいと思います。折角の素晴らしい内容ですから、もつとおもしろく楽しく伝えるように目指していただければと思います。

言の葉にしたためゆけば深まりて此の生更に彩やかならん

和歌を通じて心が通った

(福岡市立百道中学校教諭 小林拓海)

社会人になり、初めて班員として参加した合宿教室でした。今までに参加した合宿教室でも、和歌を詠み、班別相互批評を通して心が通ひ合ってきましたが、今回の合宿はとくに濃ひやうに思ひました。和歌を詠み、自分の心を素直に表現することの難しさ、大切さを知ること、他の人が詠んだ歌をしつかりと味はふことができたと思ひます。その和歌を通して歴代の天皇方や偉人の人柄について、班員と共に深く入っていたやうに思ひます。

與島誠史先生の合宿導入講義の中では、「ご先祖さまがある

からこそ僕たちがあゝある。一人一人がご先祖様の命の結晶であり、歴史は遠いものではなく、僕たちの内面にあるもの」とお話しがありました。その内面をこれからもしつかりと学んで行きたいと思ひます。

笹栗に「よりよく生きる」と友集ひ和歌を詠み合ひ心通ずる

印象に残ったこと

(熊本県立熊本高等学校教諭 久保田 真)

與島誠史さんが導入講義で松陰の文章を取り上げられた所が印象に残つてゐます。「我が国体の外国と異る所以の大義を明かにし、闔国の人は闔国の為に死し、闔藩の人は闔藩の為に死し、臣は君の為に死し、子は父の為に死するの志確乎たらば、何ぞ諸蛮を畏れんや」といふ所は、自分は読む資格がないと痛感された三十年前の経験が話された。いかばかりの気持ちを持ち続けてをられるのかと思ふ。

廣木寧先輩が紹介された、福澤諭吉の『瘠我慢の説』も印象に残つた。西郷隆盛と勝海舟の無血開城は英断として美談で語られるが、なぜ戦はなかつたかと批判してゐるといふことである。「勝算なき限りは速に和して速に事を収るに若かずとの数理を信じたるものより外ならず」数百年養ひ得たる我日本武士の氣風を傷ふたるの不利は決して少々ならず。得を以て損を償ふに足らざるものと云ふ可し。」と批判してゐるのは大変面白いと思つた。深い精神性の高さをよく示すものだ

と思ふ。

班員と一緒に食事をとる

テーブルを囲みて語れば心和み古き友らと過ごす心地す

人と心を通はせていくことの大切さ

(目章工業(株) 藤信成信)

廣木寧大兄、古川広治兄ら運営にご尽力下さった皆様にご
謝申し上げます。施設としては、空調の時間が限られてゐる
こと以外はすばらしく、福岡で開催するには好適と思ひます。
班付として参加しました二班につきましては、若手社会人
を中心として意欲的な参加者ばかりで、また久保田真班長の
リードの下に、班別研修も大変充実してゐたと存じます。私
自身三日間の合宿生活を通して日頃如何に人の話を大切に聞
き、周りの人々と心を通はせて過ごすことができてゐないか
を学ばせて頂いたやうに思ひます。特に短歌相互批評の時間
については、年令や経験の差を超えて自づから心一つにし
人と心を通はせていくことの大切さに気づくために大切な研
修であると再確認いたしました。ありがたうございました。
若きらと心なごませ学び合ふ二泊三日は夢のごとしも



講義。(株)寺子屋モデル 廣木寧氏は、昨年ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イ
シグロ氏の「過去を語り合うことに意味が見出されない」といふ一文について、そ
のことは「人が記憶をなくしている」あるいは忘れさせられてゐることから生じて
ゐると説かれた。

カメラ・レポート5

第三班

納得できた神話の大切さ

(猪部敬彦)

三度目となる今回は正直に言つて私には少々レベルが高過ぎて消化不良気味であった。帰宅して自分なりに講義資料を読み直してみたい。その中で私にとつて一番納得できたのは三日目の山口秀範先生の「人がら、家がら、国がら」のご講義であった。二十年以上昔に神話の大切さを出雲井晶先生のご講義で拝聴したが、その時は今ひとつ得心できなかった。しかし山口先生の素晴らしいご講義で自分の中で神話の大切さが揺るぎのない確信となった。「神話を忘れた民族は滅ぶ」の格言を一人でも多くの日本人に伝えられるように今後も学びを深めてゆきたい。

この合宿教室を支えて下さった先生方、先輩方に感謝申し上げます。

汗かくを忘るるばかりに友皆とひとつ心になるは楽しき

家族の思ひやりにあらためて感謝したい

(元 大村郵便局 橋本公明)

今回の合宿ではこの合宿に送り出してくれた家族の思ひやりをあらためて学んだ。合宿では人の心を大切にしようとするもの、合宿を終へ家族の元へ帰ると合宿での思ひやりの心が弱まってゆくのがこれまでであった。あらためて家族の思ひやりがあつてこそ合宿で学べることをありがたく思ひ感謝したい。

北村公一さんの短歌創作導入講義を聞き

とつとつと話されゆくも心から出づる言葉の力強しも

「より善く生きるために」努めて行きたい

(内山慶子)

「現代をより善く生きるために」とのものと、これからの生き方も含めてしばしの間考えることができました。これから毎日の生活を送る上で「より善く生きる」を求めて自分自身努めて行きたいと思います。「記憶があるから生きていける」と副題のついた廣木寧講師のご講義の学ぶこと、知ること(歴史その他)について目標を立て励んでまいります。「人がら、家がら、国がら」と題された山口秀範講師のご講義では天照大神から歴代天皇につながる日本の国がらが私たち一人一人の人がらとなり、それが家がらとなっていることを学びました。皇室のご存在が私たち日本人にとつて大きな支えであることも教えていただきました。日常生活の中、忘れてしまいがちな

ことを気づかせて頂き感謝致します。皆様が真摯に学ばれているお姿にも大切なものを学びました。

通ひ来て「より善く生きむ」と学びたるこの日生かして日々を過すいさむ

亡き母の思ひ出と共に合宿教室に参加して

(折尾愛真短期大学 松田 隆)

今年の合宿教室は福岡県篠栗町の社会教育総合センターで行はれ、福岡県の教員の一人として働いてゐる私としては、数年振りに当地を訪れ、懐かしい思ひで合宿教室が始まりました。

この篠栗町は今は亡き実母と妻、そしてその義母と私の四人で今から七年以上前に二、三度訪れてをり、私にとつては特に思ひ出の深い地であるが故に、正直に言つて今回の合宿教室ではそのことから心が離れませんでした。

しかしながら、合宿教室の講義を聴く内に「歴史」の意義、「歴史」の大切さが今一度再確認できたやうな感じがしています。

来年度の合宿は東西が統一されて開催され、またその合宿に参加できることを祈つてをります。

短歌散策地の釋迦涅槃像を訪ねて

亡き母の供養となりしかこの度の短歌の散策有りがたきかな

カメラ・レポート6



短歌創作導入講義。税理士法人あおぞら 北村公一氏は、本会の廣瀬誠氏の癌闘病詠草集『坂の沼琴』に苦しい闘病生活の様子を偲び、短歌は手慰みでなく、自らの心を見つめるところから詠まれる。自分の心を見つめ、それにふさはしい正確で適切な言葉を探ることが心を磨く、と説かれた。

歴史といふ記憶を辿ることに努めたい

(福岡県立鞍手高等学校教諭 日比生哲也)

廣木寧先生の「記憶があるから生きていける」との言葉が胸に残ります。インシグロカズオ氏が「不意にこれまででない差し迫った思いにとりつかれ」て執筆した時の心情、また「現代においては、たくさんの国家や民族」が「忘却の霧に覆われ」てゐるといふ指摘など、我々の置かれてゐる状況が浮かび上がってくる思ひが致しました。また「蘭学事始再版の序」で、当時の福沢諭吉が「艦舵なき船の大海」で生きた先人の苦心を察する姿勢に学び、歴史といふ記憶を辿ることに努めたいと感じました。

與島誠央先生の講義を聴きて

日に灼けし面輪朗らか先輩は父君のこと語り始めぬ

日の本に帰りて生きよとふ上官の命令なくば我が生あらずと

歴史を見る目を養いたい

(天本和馬)

短い日程にかかわらず充実した毎日を通した。合宿テーマ「人は後ろ向きに未来へ入って行く」を念頭に取り組んだ。

「導入講義の與島誠央先生の「歴史が教えてくれるもの」では父君の記憶を胸に新人教師としてスタートした氏の歴史を感じた。廣木寧先生の講義ではカズオインシグロ、福澤諭吉、勝海

舟の中にある記憶を思い出すことで現在の自分の生き方を定めることの大切さを学んだ。一方で経験していない歴史を後解釈で理解することの危うさにも気付かされた。諭吉、海舟もそれぞれ過去を振り返って互いを批判しているがそれらの事実の立脚点は大きく異なっている。経験していない歴史は如何様にも再構成できるが、一方で経験した歴史事実であっても再構成のやり方によっては異なった解釈が可能になることを示していると感じた。ここで歴史を見る目を養うこと、歴史と謙虚に向き合い、耳を澄ます今の自分の姿勢が何より大切と思う。

おぼろげに学びし歴史もその折の人の言葉に触れるうれしさ

先人の言葉に根気よく接してゆきたい

(熊本大学非常勤講師 白濱 裕)

先づは廣木寧委員長、古川広治指揮班長はじめ運営に当たった皆様に感謝したい。猛暑下、施設利用の面では幾つかの不自由を感じたが内容的には大変充実した合宿であった。全ての講義が「過去」「記憶」||「歴史」として向き合ふことの大切さを説くことで一貫してをり、先人の遺した文献に根気強く接してゆきたいと思ふ。熊本では今回参加できなかったメンバーもゐたが帰郷後、報告会を兼ね合会を持ちたいと思ふ。学生勧誘の問題はあるが先づは会員同士の絆を固くし会員以外の心ある社会人にも拡げてゆく努力を積み重ねたい。

有難うございました。

野元政司兄へ

初めての参加は如何と案ぜしも郷友と語らふ姿頼もしく

故郷に帰りて後も怠らず学びの道に共に励まむ

第四班

我が国の素晴しさを周りに伝えていきたい

(吉田調剤薬局 吉田喜久子)

どの講師のお話にも自分の勉強不足を痛感させられ、今後取り組むべき課題を沢山頂いて、感謝の気持ちで一杯です。

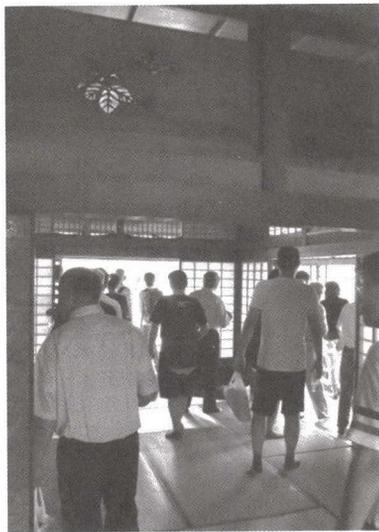
「歴史を学ぶ」のではなく、「歴史に学ぶ」日々でありたいと思っております。

現代の日本を思うと、惨憺たる状況に気が気ではありませんが、嘆いてばかりいても始まりません。

今回の合宿で学んだ事を単なる学び、知識に終らせず、自分で出来る事からこつこつとやってみていかなくては、と気を引き締め、子供、孫達だけでなく周りの人達へ、我国の素晴らしい伝統文化、歴史を伝えていく努力を続けたいと思っております。

お互ひに意見を交はし学び合ふ班別研修胸に焼きつく

カメラ・レポート7



レクリエーション。伊藤藤右衛門邸内(右)と南蔵院(左)を見学する参加者。

自分を考え直すよい機会となった

(関西信和会 細谷真人)

非常に学びの多い合宿だった。お誘い頂いた北村公一さんを始め、関西信和会の皆様に感謝したい。

今年六月末に三十四年間勤めた会社を退職し、今後、コーチとしての独立開業を考えている今の自分にとって、今合宿は、自分とは何者であるか―アイデンティティを考え直すよい機会となった。今合宿のテーマ「現代をより善く生きるために」は、正にコーチがクライアントと共に探索すべき普遍的な課題である。

合宿を終えた今、「自分のアイデンティティを家族に伝えること」と「明治天皇の御製を味わうこと」の二点に、楽しみながら取り組んで行きたい。

合宿をやり終へ安堵のひとつときに自らに課すテーマ楽しき

日本の国がらについて考えさせられた

(福正会 中島保博)

私は、初めての合宿に二つのテーマを持って臨みました。一つはよく聴くこと(情報入手)、もう一つは活学(仕事に活かすこと)です。

吉田松陰に関する講義では、私が探していた活学に触れることができました。また、「いつも過去に励まされている」で

は、カズオ・イシグロが大和魂によってイギリスの再生に貢献したと感じました。

短歌創作や歴代天皇の御製に関する講義などにより、日本の国がらについてあらためて考えさせられました。短歌創作は初めての経験でしたが、日本の国がらを学ぶためにも、先ず、明治天皇の御製を勉強する決意をしました。

合宿で皆と学んだよき短歌これから励まむ国がらづくり

楽しい合宿だった

(みどりヶ丘保育園 西山八郎)

班別討論において活発な議論ができ、久しぶりに学生時代に戻ったような気分でした。レクレーションや講義に関する語らいなど、班の人たちともゆつくりと過ごす時間が持てたことが有難く、楽しい合宿となりました。

合宿の運営委員長、指揮班、事務局の皆様にご挨拶を申し上げます。準備や連絡調整など、ご苦労も多かったことでしょう。ゆつくりと身体を休めて下さい。

合宿を終へるに当たって

過ぎしこし時振り返り打ちとけて語りしことのみがへりくる
それぞれにさかりゆくとも学びたることを留めて深め合はなむ
をちこちに住まひすれどもあけくれの便り交して励みゆかなむ

子規と芭蕉の志の一端なりとも受け継ぎたい

(元 熊本市役所 折田豊生)

子規は、まさしく、芭蕉の再来と言つてよかつた。兩人とも、俗世を肯定しながら、人としての理想の生き方を追求した点に感銘を受ける。二人は天才でも何でもない。死の直前までその道の探求に敢然と従事したその志の高さをこそ、第一番に評価しなければならない。その悲しいばかりの使命は、ほかでもない、全て己自身が突き付けたものだつた。自分自身の課題を省み、兩人の志の一端なりとも受け継いで行きたいと思ふ。

この道にたふれし人のみこころに幾度泣きて幾月や経ぬ
うつし世の人のまごころそが中に風雅の道はありとこそ知れ
開けゆく道あれ秋のとも字び

蘭学事始を是非読んでみたくなりました

(元 マツダ(株) 久々宮 章)

講義を担当された皆様、合宿運営に携わられた皆様に心より感謝申し上げます。昨年に続いてこの合宿に参加しました。今年も講義や班別討論に刺激を受けました。その一端をのべ感想と致します。廣木寧先生が講義で紹介された福沢諭吉の文章、とりわけ「蘭学事始再版の序」にまつわる話は興味深い内容でした。高齢となった杉田玄白が蘭学草創期のオラン

カメラ・レポート8



古典講義。国民文化研究会参与 折田豊生氏は、共に高い理想を抱き、無欲で権威に盲従せず、絶命の間際まで道を追求した芭蕉と子規を偲び、今日の情意が枯渇した時代に、風雅の道に生きる意味とは何かを問はねばならない。「文化の戦士」たれ、と呼び掛けられた。

ダの医学書翻訳の悪戦苦闘の苦心談を自らの記憶する史実として「蘭学事始」を書き残した。諭吉はこの再版の序文で「先人の苦心を察し、その剛勇に驚き、其の誠意誠心に感じ、感極まりて泣かざるはなし。」と書き遺した。廣木先生はこのことを記憶が生き続け、その記憶という過去に励まされたのだと語られたのだと思いました。蘭学事始を是非読んでみたくなりました。

友の講義を聞きて

これまでに温めしこと口早に語り給へり思ひあふれて

第五班

言葉遣いにも「人がら」が出ている

（華泉書道会 坂本和代）

合宿導入講義、與島誠央先生の初任の頃の生徒から受けた質問、「先生、こんな昔のこと勉強して何の役に立つん？」を聞いて、思い出しました。書を教えて何年かたった頃、生徒から「先生、どうして学校に行かないかと？」、「先生、どうして話す言葉が字になると？」、「先生、神様っていると？」、「うむ！・・・」と言いなながら答えはしましたが、今なら少しはましな答えができたんじゃないかと思えます。生徒に対する言葉遣いにも「人がら」が出ているのを気付かなかったこと

を反省しています。言葉は情に繋がりが、心を磨くことに通じ
るんですね。

六十路すぎ字びの合宿やどの楽しみは歴史に和歌に班別研修

古典や和歌の勉強を深めていきたい

（上天草総合病院 福田 誠）

二泊三日と短い合宿でしたが、充実した内容でした。合宿運営に携はれた方々にお礼申し上げます。導入講義、短歌創作レクレーション、古典講義、短歌相互批評、天皇を中心とした日本の国がらの話、と流れよく内容が深まったと思ひます。今後も、古典や和歌の勉強を深めていきたいと思ひました。

社会人参加の時間帯が比較的自由度が高いことは参加しやすく有難いと思ひました。参加学生の減少は今後の重要な課題と思ひます。

酷暑の中の開催で空調の無い時間帯の宿泊室は、正直厳しいものでした。

湯上りて佇みをれば部屋内の暑さに汗の再び噴き出る風もなき夕べの部屋に班友らと汗拭ひつつ語りし学舎

取り組むべき課題が見つかった

（福岡県立博多青松高等学校教諭 藤 寛明）

講師の方々の講義に耳を傾け、先人の文章に迫り、班別で討論し、短歌を創作するといふ充実した時間を過ごすことができた。久しぶりに精神が緊張し、快い疲労を感じてゐる。今後、いくつかの課題に取り組まなくてはならない。(一)「蘭学事始」を読むこと。(二)「瘠我慢の説」を精読し、江戸無血開城について徳富蘇峰の説で理解してゐたことを、資料に自ら当たつて再考してみること。(三)俳句について、各々の句の意味がよく判らず、また芭蕉の文章が殆ど読めなかつたので、古文と俳句の勉強を始めること。以上三点を書き留めることによつて、忘備録とする。

思ふこと思ふがままに語らへる友と会すは有難きかな

今年も合宿に参加できてよかつた

(元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣)

初日の夜、與島誠央君が登壇し「私達は過去を見る時、現在の意識からなかなか離れることが出来ない」と言つたことが主テーマとなつて流れ出し、翌日、廣木寧君が忘却の霧を打ち払ひ、過去を知る喜びを語つてくれ、正しく感動をもつて歴史をとらへる力と弾みを与へてくれた。折田豊生君が改革者の使命として子規、芭蕉にふれ、詳しく資料で、風雅の道をささやかながら踏む指標が示された。山口秀範君の講義のあと、班に戻り今上陛下昭和天皇の歌を拝誦した。陛下方が国民に寄せられるお気持ちのばれ、涙が出て仕方がな



創作短歌全体批評。I B J L東芝リース(株) 小柳志乃夫氏は、短歌の相互批評は、作者の気持ちを憶念し、皆で協力してその心に沿つた表現を求める作業であり、心と言葉が一致した時に湧いてくる喜びを是非とも体験して欲しい、と示された。

かった。有難い天皇様を戴く国民の仕合せをしみじみ感ずることができた。今年も合宿に参加できてよかったと感謝してゐます。

古川広治君のひたむきさに

バスの中古川君はくり返し「短歌つくれ」とうまず言ひけり

小柳志乃夫君登壇の折に

前の夜はすべての短歌に目を通し作者の心にせまり給へり

詠まれたる友の短歌を正確に添削しけり心を込めて

朝の集ひに

日の丸を掲揚すれば吹きわたる風は涼しも秋も近づく

御製に触れていきたい

(飯塚市立額田中学校教諭 大津健志)

とても有意義な時間を過ごせました。心に残ったことが三つあります。一つ目は、班の先輩方に温かく受け入れてもらったことです。すんなりと班に打ち解けることができました。また、班別研修でも判らない所を丁寧話し合えるなど、大きな学びとなりました。二つ目は、山口秀範先生の講義で「人から・家から・国から」が繋がったことです。「人から」や「家から」は身近でわかりますが、「国から」は明確になっていませんでした。それが中国やアメリカと比較しながら、水戸藩を中心に講義して頂き、とても明確になりました。三つ目は短歌を作り、歴代天皇の御製を皆で詠めたことです。自

分の心を正確に表せるように苦心し、表現する喜びを感じました。また、歴代天皇の御製からその当時の日本の状況や大御心に触れられたが、本当に良かったです。今後は「国から」の理解を深め、子供たちに伝えていくためにも、御製に触れていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

不安げに部屋に入れば懐かしき先生方の学ばれてをり
顔見れば気持ちなごむも真剣な雰囲気伝はり心を正す

有意義な内容に感動

(元小学校教諭 野元政司)

初めて参加させていただきました。大変有意義な内容にとっても感動しています。短歌創作ではレクチャーだけでなく、班ごとの批評の場もあって、勉強になりました。講義はどれも内容が深く日頃の研究の一端を学ぶことができ感謝しています。それを受けての班別研修は活発な意見や感想が出され、さらに深く学ぶきっかけとなりました。運営に携われた皆様、大変有難うございました。

遺されし松陰先生の文章を共に学びて絆深まる

国民文化研究会

いくつか気づいた点を

(原土井病院 小柳左門)

短期間の合宿で、しかも参加者は少かつたけれども、合宿の準備、運営に力を尽くされた方々に、心から御礼申し上げます。以下いくつか気づいた点を記します。

一、山口秀範さんの御講義でようやく御製が紹介されて安堵しましたが、朝の集ひの折に一首でも声をそろへて拝誦することができればと思つたことでした。

一、フリーといふ立場でしたので、全ての班で班別研修を体験させて頂きました。印象に残つたのは第二班で、澆刺とした会話で進み、思ふこと思ふがままに云ひてみむ、といふ感じでした。皆の人柄にもよりますが、男女混合も、心を和するによかつたのではと思ひます。

一、小野吉宣さんの御講話は、その熱意と真心に大変感動しました。

報恩の心あふるる韓国の人の心に胸打たれけり
からくに

一、会場は、空調の時間など制約多く、少々経費はかかつても快適で自由に語ることのできる会場を望みます。

山口秀範さんの御講義

日本の本の国柄守り生くことのよろこび語りやまぬ友かな
力強き友の言葉は胸をうちおのづ涙の流れくるなり
国民を守りゆかむとただひたにわが大君は心尽くさる
慈しみ深き御心したひつつこたへて和する民の心は



講義。(株)寺子屋モデル代表 山口秀範氏は、我が国の「国がら」は『日本書記』の「天壤無窮の神勅」と「神武天皇の建国の詔」に示されてをり、そのご精神は歴代天皇方に連綿と受け継がれてゐる。御歴代の御製に触れてそれを確認して欲しい、と訴へられた。

カメラ・レポート 10

君と民のひとつ心に国がらを守りゆきなむ世は下つともくだ

本部・事務局・指揮班

この機縁を何らか生かしていければ

(I B J L 東芝リース株) 小柳志乃夫

閉会の挨拶は準備不足のまま、取り止めのない話になり、申し訳なく思ひます。

全体感想発表がなく、参加者の反応がまだよくわかりませんが、この機縁を何らか生かしていければと思ひます。

東京の方で努めたく思ひます。

小野吉宣先輩のお話を聞きて

久し振りに聞く先輩のお話に入れらる心地するかな
おほらかに若き友らに語ります姿昔に変わりたまはず

「歴史に学ぶ」楽しさについて考へさせていただいた

(株)ラック 高橋俊太郎

本合宿の副題は「現代をより善く生きるために〜人は後ろ向きに未来に入ってゆく〜」といふもので、最初は「後ろ向きに」といふネガティブな印象を持つ言葉が腑に落ちてゐませんでした、合宿導入講義での「歴史を学ぶ」ではなく「歴

史に学ぶ」といふお話や廣木寧先生の「過去を語る喜び、使命について」のお話を伺ふ中で、腑に落ちたやうに思ひます。廣木先生のお話の最後にありました「記憶はなぜ忘れられるのかについて語ったのではなく、過去を語る喜びについて語った」といふ点が、あらためて歴史に学ぶ楽しさについて考へさせて頂いたと思ひます。

また、折田豊生先生のご講義の中での「俗中の風雅」「風雅の誠の探究」といふ点が、歴史を学ぶ楽しさとは観点が少し違ひますが、四季の移り変りを味はふといふ点で近しいものを感じました。

古の記憶を学ぶ楽しさを気づきなほしてまた学ばんとす

ありし日の大日方学先輩のお姿が心に浮かんだ

(朝倉公共職業安定所 古川広治)

「歌稿」の中に吉村浩之先輩の大日方学先輩のことを偲ばれた御歌があつた。吉村先輩が大日方先輩の御霊に唯々祈られるお姿が心に浮かぶと共に、大日方先輩のありし日のお姿が心に浮かんできた。誠実に指揮班長の仕事に取り組む大日方先輩のお姿である。心が正される思ひになった。そして、残りの日程に取り組む力となった。

大日方学先輩を思ふ

幾度も指揮班長つとめし先輩のみ声み姿よみがへりくる

音声録音、写真記録、集合写真を問題なく終了できた

(医療法人豊司会 新門司病院 森田仁士)

今回は指揮班付きで、音声録音と写真記録及び全員集合写真の撮影と印刷まで(自分のパソコンとプリンターを合宿地へ持参して印刷2L版60枚を実施)を担当した。古川広治指揮班長のお手伝ひは出来なかったが、前記3点はほぼ問題なく終了できた

今回講義室に使用した室は、音響設備が劣悪であった。ほとんどマイク無しの生の声の状態であり、講師等の登壇者にご迷惑をおかけすることとなった。

小野吉宣先輩の御講話をお聴きして

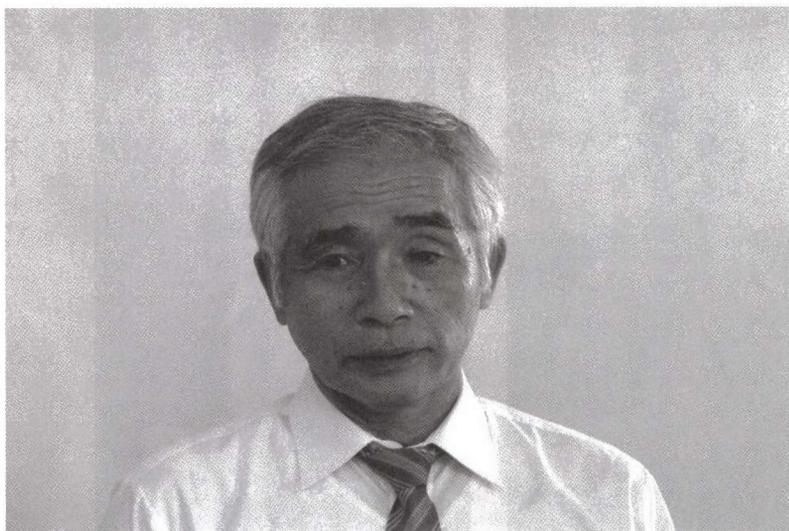
若さらに元氣与へむとふるひたち語りかけゆく先輩どもありがたし

自己への具体的肯定的感情を恵まれること

(元(株)アルバック 北濱 道)

歴史上の人物の力一杯生きた跡を、遺された言葉に具体的に偲ぶ、或は短歌創作で自分の心を見つめ、それをなるべく正直に言葉にしようとする、といふ苦闘の中で、私達は如何に自己への具体的肯定的感情を恵まれることか。今合宿で、講師の皆さんがそれぞれ工夫を凝らし話をされるのを伺ひ、改めてさう思った。我が国の歴史の反省謝罪を好んでする人

カメラ・レポート 11



講話。元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣氏は、福岡県宮若市に建つ「俵口和一郎(頌)徳碑」「謝恩碑」につき、当時炭鉱で働いてみた朝鮮人労働者が炭鉱長の俵口氏が退職する際その徳をたたへ、感謝した大変素晴らしい記念碑で、近年珍妙な強制労働説が流布してゐるが、外務省の適切な対応を願つてゐる、と述べられた。

は、この感情を持ってないのだと思ふ。先づ自らこれを行ひ、身近な人も誘つて学んでいきたい。

指揮班としての作業にて

重き椅子三つほど片の肩に載せ前走りゆく岡部君かな

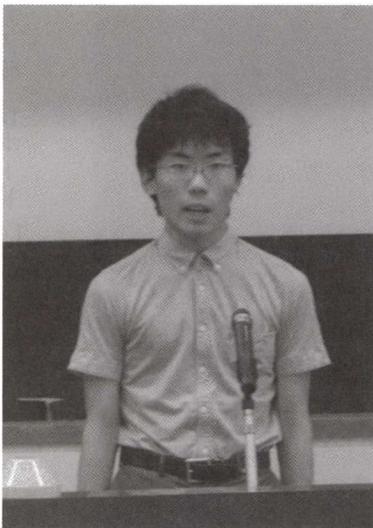
ヘラクレスと見紛ふばかりの体にて顔色変へず働く君は

表面的にしか考えることが出来ていなかった

(Hubax(株) 岡部智哉)

「おくのほそ道」の「心の色うるはしからざれば、外に言葉を巧む。これすなわち、常に誠をつとめざる心の俗なり」は多分に厳しく、耳の痛い言葉でありました。芭蕉は「思ふ心の色、物と成りて句姿定まるものなれば、取る物自然にして子細なし」と、風雅にいる者を表現しています。そこへ近づくには、知識を句や歌、文章を読むことによつて培うことは無論、詠むという実践行為によつて身に定着させ、「外に言葉を巧む」邪念を削いでいくことから始まると思ひました。そしてある一つの小さな分野に人生や命を懸けた人間がいたという事実は、上記のように句や歌を自然に詠む自分なりの方法論を書いてみたところで、途端に突き放されるようです。合宿教室を通して実に自分が表面的な部分でしか見る事が、考えることが出来ていないように思えてなりませんでした。

カメラ・レポート 12



閉会式。小柳志乃夫国文研副理事長(右)は、「これからも皆さんと共に精進して行きたい」と挨拶された。福岡大学経済学部三年西田忠正君(左)が閉会を宣言した。

合宿中に創作された『短歌詠草』
——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、忘れたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の北村公二氏（税理士法人あおぞら）により短歌創作導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の小柳志乃夫氏（IBJL東芝リース（株））によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた講評の中で作者の一語一語に含まれる心を偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草

(しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品

(班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。)

第一班

広島修道大学 法 四年 田中壯卓

朝よりの講義に耳を傾けんとすれども瞼の重たくなりぬ

福岡大学 経 三年 西田忠正

夏の伊藤伝右衛門邸にて

日頃より興味を持ちし邸宅を見れども暑さの辛さ勝りけり

福岡大学 経 一年 笠原康嗣

帽子かぶりステップ降りて砂利道にバスのひんやりと別れ出て行く

神奈川大学 人間科学 三年 中尾創哉

そびえたつビルに囲まるる横浜で見慣れし空は狭きものかな

筑豊の広き空の下のびのびと我れは友らと集ひ学びぬ

ここで得し力と友を糧にして我は何処へ歩まんとするか

福岡大学 経 一年 平川龍也

旧伊藤伝右衛門邸にて

リンドウが主なき家の床の間にいけられてあり色もしるけく

福岡工業大学 短期 一年 井野口祐樹

山道を涼しさ求めて友とゆき流るる滝のしぶきに見ほるる

福岡大学 経 一年 桃崎善希

昔の大きな屋敷を訪れて懐古のほひに心落ち着く

税理士法人あおぞら 北村公一

短歌創作導入講義

拙かる我れの話の顔を上げて聞き給ひたる友ら有難し

旧伊藤伝右衛門邸にて

大広間に座りて庭を眺むれば熱き夏風吹きぬけにけり

南蔵院にて

涅槃像の前の広場でさまさまのポーズで友らと写し絵撮りぬ

灼かれたる石畳の上に横たはり二の腕の熱きにしばし耐へたり

ツクツクボウシの声の辺りをよく見れば腹

ふるはせて幹に止まれり

福岡県立筑紫中央高等学校教諭 與島誠央

八木山峠を越えてレクリエーションに

出かけし折

三十年の昔懐かしこの峠越えて初任の地向かひたり

をちこちに桜花咲く山道を友とめでつつ越えしかの日よ

高校の教師人生始めゆく道にてありしか八木山峠は

木山峠は

第二班

熊本県立熊本高等学校教諭 久保田 真

與島誠央先輩の講義を聞きて

いにしへの文読めぬ読めぬと苦悩せし学生時代の大人思ひ出す

「どうお前、読めてをるか」と問ひたまふ

学生時代の大人思ひ出す

(二社) 福岡中小企業経営者協会 大慈彌祐子

旧伊藤伝右衛門邸を訪れて

時を越え気品に充つる邸宅の造りにひかれ

飽かず眺むる

(学) 中村学園 松村沙織

開会式前の日没を見て

あかく燃ゆる夕日に心あらはれて学びゆき
たし日本の歴史を

(株) グランドビジョン 河野晟之

旧伊藤伝右衛門邸を訪れて
庭をわたる涼風受けて大広間に浮世を離れ
ひと眠りせん

(株) カウテレビジョン 小川雅裕

旧伊藤伝右衛門邸にて

夏空の下に立ちたる旧邸に榮えし往時を見
るこちする

(株) グランドビジョン 川西 潤

旧伊藤伝右衛門邸を訪れて。

都から筑豊へ嫁ぎ、愛、財に囲まれ

不自由ない生活をせし白蓮

美しき庭をいくとせながむれど都の暮らし
思はざりしか

福岡市立百地中学校教諭 小林拓海

チヨロチヨロと山水流るる音聞けば林の木

陰に暑さや和らぐ

中村学園大学 教 三年 日野ゆかり

篠栗南蔵院釈迦涅槃像前にて

涅槃像の足の裏から顔を出し失礼しますと
写し絵をとる

日章工業(株) 藤信成信

みともらと一列になり涅槃像まねてねころ
び写し絵をとる

みともらと笑ひさざめき熱さこらへねころ
びをればせみしぐれなく

第三班

熊本大学非常勤講師 白濱 裕

レクレーションにて

くねくねとカーブ続きて緑濃き八木山峠を
バス登りゆく

八木山と聞けば懐かしこの地にて集ひを持
ちしゆ^{よそよそ}四十年余りか

迷ひもて参加したるも今に続く心定めし集
ひとりなりぬ

元 大村郵便局 橋本公明

緑なる木々に囲まれ大仏の横たはる様悠然
として

旧伊藤伝右衛門邸にて

天本和馬

部屋ごとに異なるつくりの欄間には意匠凝

らしし工夫しのばる

半割れの竹をちどりに並べたる床間天井部
屋に映えたり

凝りたるも華美に流れぬ意匠には翁の手柄
しのばれてあり

猪部敬彦

吹き出づる汗のごひつつ見上ぐれば釈迦の
お顔は涼やかにおはす

麗人の住まひし部屋に詫みて炭鉢榮えし往
時偲びぬ

熊本市記念館 末次直人

篠栗南蔵院の釈迦涅槃像に詣でて

友どちと汗をかきつつ参り来て休む日陰に
風吹きわたる

明治中期の飯塚の炭鉱を描写する山本
作米兵衛氏の絵画を見て

地の底で手掘す民に日の本の文明ささへし
労見たり

折尾愛真短期大学 松田 隆

篠栗に幾たび母を連れて来しその思ひ出の
蘇るなり

今は亡き母への思ひ蘇る釈迦涅槃像の姿
麗し

今も

今も

今も

今も

今も

今も

今も

第四班

関西信和会 細谷真人
旧伊藤伝右衛門邸にて

あちらこちらと見所多き大屋敷見てゆくほどに時を忘るる
クリスタルのステンドグラスは移りゆく季節の彩り映すとぞ言ふ

みどりヶ丘保育園 西山八郎
旧伊藤伝右衛門邸を訪れて

筑豊の石炭王が住みしとふ館の高き門をくぐりぬ

夏の盛りに
部屋ごとに贅を尽くせし邸宅を訪ふ人多し
主なき館に残る庭園を見つつ往時の栄華しのぶも

福正会 中島保博
旧伊藤伝右衛門邸を訪れて

大きな石と芝なる庭園にたくみのわざの深さを思ふ

吉田調劑薬局 吉田喜久子

日の丸を仰ぎて君が代歌ふ時自づと心の高まり覚ゆ
松陰の言葉をさらに仲間らとたどりゆく時

尊かりけり

新しき教へ学びて幼児のごとき心地で耳澄ますなり
おきなご

元 熊本市役所 折田豊生

篠栗の学びのつどひになつかしき友らと会へば胸のたかぶる
久々にまみえし友に久しくも会はざる友のあけくれを聞く

窓の外は夏の名残りの陽の光あふれてけやきの風に踊れる
青々と木々繁りたる山見れば友らもかくと偲はるるかな

元 マツダ(株) 久々宮 章

南蔵院にて

木々に陰る坂道に入ればせせらぎの音の聞こえく涼風吹きて

聞きしより造りの太き涅槃仏微笑かに笑みておはしますかな

第五班

華泉書道会 坂本和代

炭鉱王、伊藤伝右衛門邸にて

光る庭に樹々の緑も輝きて今なほ遺る栄華の王邸
のこ

上天草総合病院 福田 誠

合宿レクレーション

炭鉱のかほり漂ふ飯塚と篠栗の地の史蹟めぐりぬ

旧伊藤伝右衛門邸

庭園や邸の粹に筑豊の炭鉱産業の栄華偲はゆ

南蔵院

耐へ難き暑さの中に訪ねたる釈迦涅槃像の御顔涼しき

福岡県立博多青松高等学校教諭 藤 寛明
「蘭学事始」の復刻に関する話を聴きて

西洋の学術摂取の苦心をば古人に偲びし論吉かしこし

今もなほ西洋思想の中にある我らの苦境を示し給へり

元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣
與島誠央君の講義の折に

南京で終戦迎へし父上の昔話をありあり語りき

敗戦の責をとりたる上官は頭を撃ちて果て給ひしと

部下達に「ここでは死ぬな国元の墓前に参れ」とたしなめ給ふ

同じく松陰先生のことに触れし折りに

合宿に参加できた喜びのふつふつと沸く君の話に

二元 小学校教諭 野元政司

讀されし松陰先生の文章に共に学びて絆深まる

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 今林賢郁

空高く雲は流れて夏山の緑しるけしこ南蔵院

夏山の緑背にして横たはる釈迦涅槃像何おぼすらむ

(二回目の作品)

西日本合宿、閉会式の前に

一年を努めきたれるみ友らの西の集ひは今年終らむとす

東の集ひもはまた近づきぬ心奮ひて努めゆかなむ

次々と起る課題打ち砕く力は友らの支へなりけり

「極まればまたよみがへる道」ありと思ひ定めて行かむとぞ思ふ(川出麻須美氏の歌)

原土井病院 小柳左門

朝の集ひにて

むら雲は若杉山の空をゆき風やや涼し朝の広場は

むし暑さいまだ残れど篠栗の山の上より法師蟬なく

木々の葉はもみちをおびて秋近き山辺の道を友と歩みぬ

年ゆかぬ子供らもともに日の丸を仰ぐ朝の集ひはうれし

(株)寺子屋モデル 山口秀範

運営委員長廣木寧兄登壇

一年をかけて備へし合宿を迎へて君いま壇上に立つ

ノーベル賞作家の境遇たどりつつ日本なるものを問ひ直すかな

西洋に翻弄され来し近代の見直し迫る口ぶり強し

若きらへ託す思ひは自づから囁んで含むる語りににじむ

体調の万全ならずも一年を努め来し君の功称へむ

運営本部

(株)寺子屋モデル 廣木 寧

北村公一さんの短歌創作導入講義に

廣瀬誠先生の歌が取り上げられて

病める夫に心痛めつつ思はずも口に出でたる萬葉の歌

夫思ひ火にも水にもわが身をも投げ捨てんとど萬葉の歌

廣瀬先生の重き病を受けとめてわれ無げなくにと祈る夫人かも

(二回目の作品)

閉会式を前にして

かにかくも一つ一つの日程が進みて終ふるに安堵の思ひす

指揮班長古川広治氏をま中にして森田北濱岡部氏らが助く

ここ一年動かんとして動き得ず運営委員長の職に慚ぢいる

IBJL東芝リース(株) 小柳志乃夫 伊藤伝右衛門邸に

飯塚の暑き日盛り伝右衛門の広壯の屋敷を友らとめぐる

新妻の為に贅をば尽しけむ炭鋳王と呼ばれし主人は

木々の緑夏空に映え石組みゆ噴き上ぐる水の涼しげに見ゆ

(株)ミユキコーポレーション 吉村浩之

亡き大日方学兄を偲びて

白雲の流るる空を仰ぎつつ南蔵院の小道を
辿る

横たはる釈迦涅槃像に手を合せ友の御霊に
唯々祈る

指揮班

朝倉公共職業安定所 古川広治

学生の指導よろしくとの送信にがんばって
ゐますとの返信うれしき

医療法人豊司会 新門司病院 森田仁士

南蔵院にて

滝の上に静かに立てる不動尊の苔むす一面
やさしく見えて

水ごりの祈りの滝は水しぶき激しくたらぬ
音響かせて

元 (株)アルバック 北濱道

みそとせ 與島誠央君の講義を聞きて

三十年を心にあたため来りたる君の思ひを
聞きまつりけり

歴史をは学びて何にならんとの生徒の問ひ
に心へ来にしと

松陰の「阿ねらず」とは開講の言にありき

と君のたまひぬ

「死する」とは「死することき」にあらざ
ると身を省みて説き給ひけり

H u b a x (株) 岡部智哉

南蔵院防人像の前に立ちて

炎暑にて防人像の目にとまる熱帯びたるは
肉体のみにあらじ

事務局

国民文化研究会事務局長 磯貝保博

事務局にて

久しくも会はねど今のみ姿を見れば昔の君
と変はらじ

こころざし変はらずであり合宿に参加いた
だく姿を見れば

(株)ラック 高橋俊太郎

朝のつどひにて

をまを 幼子と視線があひてハイタッチにつきあ
げる手と手の平あはす

合宿地に寄せられたお歌

富山県 岸本 弘

西日本合宿に集へる友らへ

日本の民とし生くるよろこびを心ゆくま

で語りませ友ら

東日本「合宿教室」



第63回合宿教室(東日本)日程表 (富士)

	9月 7日(金)	9月 8日(土)	9月 9日(日)	
6:00		起床・洗面	起床・洗面	6:00
6:30				6:30
7:00		朝の集ひ(合宿教室) 写真撮影	朝の集ひ(合宿教室)	7:00
7:20			朝の集ひ(交流の家主催)	7:20
8:00		朝食	朝食	8:00
8:30				8:30
9:00		講義 「聖徳太子の御言葉に触れて 一憲法十七条を中心に」 原川猛雄氏	清掃 創作短歌全体批評 澤部壽孫氏	9:00
9:30				9:30
10:00		班別研修	班別相互批評	10:00
10:30				10:30
11:00				11:00
11:30				11:30
12:00		昼食	昼食	12:00
12:30				12:30
13:00	受付:13:00開始	短歌創作導入講義 小柳雄平氏	講話 池松伸典氏	13:00
13:30				13:30
14:00	開会式 オリエンテーション 準備	散策 短歌創作	全体感想自由発表	14:00
14:30			感想文執筆	14:30
15:00	講義 「日米同盟の行方と中国への姿勢」 江崎道朗 先生		閉会式	15:00
15:30			15:30 解散	15:30
16:00				16:00
16:30				16:30
17:00	質疑応答・班別研修	(短歌提出) 夕べの集い(交流の家主催)		17:00
17:30				17:30
18:00	夕食・入浴・休憩	夕食・入浴・休憩		18:00
18:30				18:30
19:00				19:00
19:30				19:30
20:00	講義 「日本のこころ『古事記』」 國武忠彦氏	講義 「日本の国柄 一明治百五十年に思ふ一」 青山直幸氏		20:00
20:30				20:30
21:00	班別研修	班別研修		21:00
21:30				21:30
22:00				22:00
22:30	就寝	就寝		22:30
23:00	消灯	消灯		23:00

第六十三回「合宿教室」(東日本)のあらまし

第一日目

(九月七日・金曜日)

第六十三回全国学生青年合宿教室(東日本)は、富士山のふもと、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」にて開催された。参加者は、北は茨城県、南は九州の佐賀県から集った。

開会式

合宿教室(東日本)は筑波大学大学院二年横川翔君の開会宣言で幕を開けた。主催者代表挨拶で今林賢郁国文研理事長は、「今年には明治百五十年で、戦後は七十三年である。明治百五十年の半分が戦後といふことになるが、明治の先人たちの自主独立の気概を受け継いできたのだらうかと思ふと、内心忸怩たるものがある。自分の周辺のことしか関心を示さず、国防も米国任せといふ他者依存の風潮から脱却し、真に独立国家としての日本を再建しなければならぬ。その為には我が国の文化伝統を知らねばならないが、その道標となるのか古典だ。それは民族の記憶であり、先人が何に生きがひや価値を置いてきたのか、日本の思想に触れることができる。それが蘇れば自国と自分に対する誇りが生まれる。この合宿でその手掛かりを掴んでほしい」と述べた。次いで、池松伸典運営委員長は「講師のお話だけでなく班員の言葉にも耳を傾けて、心で感じてほしい。一つでも心に残る言葉を持ち帰ってほしい」と呼び掛けた。

講義 「日米同盟の行方と中国への姿勢」

評論家 江崎 道朗 先生



私は大学時代にこの合宿教室に参加して、生涯の師となる小柳陽太郎先生、山田輝彦先生と出会った。お二人から日本をより良くする「学問」の存在に気付かされた。先の戦争を止められなかった要因に、政治を正すための学問（学者）の側にその任務が果たせなかったことがあるといふことも教へられた。

その学問とは、知識を増やし見識を高めるとともに、自分の心を鍛えて自己自身を磨けば磨くほどいかに自分が未熟であるかを痛感するやうになるもの、他人の心の動きを「正確に理解し受け止める力」を養ふといふものである。

小柳先生からは政治家や官僚を説得する力を身に着けること、自分がどのやうな見識を持たねばならぬかを勉強することだと教へられた。私はそれ以来、単なるマスコミ批判をやめて、どう日本を良くするかに取り組んだ。平成十九年の教育基本法改正では草案作りにも携はった。この三十年間、私は学問の実践の道を歩んで来た。現在の政権中枢の要所の方に私の政策提言が受け入れられるのはその学問の力によるものだと両先生に感謝してゐる。

トランプ米共和党政権には対北朝鮮政策に四つの課題がある。その一はオバマリスク、その二は韓国リスク、その三は中国リスク、その四は日本リスクだ。オバマ政権が軍事費を大幅にカットしたため、弾薬の備蓄も減少した。金のかかる訓練が減った結果、未熟練による事故が増えた。トランプはオバマの軍縮でボロボロになったインテリジェンス機関を再建して、防衛費を増額した。備蓄や修理工場を増やしてきた。さうしなければ戦争はできない。北朝鮮の核基地は地下五十メートルの地底にあり、核では破壊できない。大型の貫通爆弾バンカーバスター爆撃機をGRAMに配備し、今年一月に完了した。このやうに一年半で攻撃態勢を整へてきたタイミングで北との和平交渉が始まった。ただし、戦争には金がかかる。北の核施設千二百ヶ所を爆撃するのに十兆円かかる。そしてアンダーソン基地のミサイル在庫は五百発であり、ただちに爆撃する能力はない。現場を知られば北朝鮮を爆撃することなどありえない。

報道で斬首作戦が伝へられるが、日本のメディアは実態を知らない。韓国の現政権は北に乗っ取られてをり、国家情報院を解体してしまった。これでは北を爆撃したらその後の制圧を韓国に期待できない。その隙を狙って中国が進出しようとする。最後

の日本リスクとは朝鮮半島と南西諸島・台湾の二方面の危機に日本が対処できないことである。

トランプは経済の締め付けで、中国の軍拡を阻止しようとしてゐる。しかし、日本のメディアはこのことを「正確に理解」してゐない。中国は本気で日本を支配しようとしてゐて、日本の大企業の株を買って経済的に君臨し、「コンドミニウム化」（共同搾取）を意味する隠語）しようとしてゐる。軍事が成り立つには経済とインテリジェンスが重要で、デフレを脱却して日米の連携で「アジアの自由」をどう守るのか、といふことが日本に迫られてゐる。

講義の後、質疑応答が行はれた。その後、参加者は各班室に戻り、講義についての班別研修を行った。社会人班には、講師の江崎道朗先生をお迎へし、なほ質疑応答頂く時間が設けられた。また江崎先生には、この後の國武忠彦先生の講義を聴講され、その後の班別研修の各班にも足を運んでいただき、親しく懇談を賜った。班別研修では講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合つた。緊張のせみか、始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

講義 「日本のこころ『古事記』」

昭和音楽大学名誉教授 國武 忠彦氏

いま、日本は「グローバル化」のなかにある。グローバル化とはヒト・モノ・カネ・情報が容易に国境を越えることで、さらにはAI（人工知能）が云々されてゐる。かうした時代なればこそ日本特有の文化を自覚することが不可欠である。

七世紀の日本は、中国文化への崇拜のなかにあつた。天武天皇は古語が失はれれば「古いにしへのイコトのイコトありさま」も失はれると憂慮されて『古事記』の筆録を企画された、と本居宣長は拝察する。また、古代の日本の言葉は、「朴すなは」である。「古より云ひ伝へたるまゝに記されたれば、そのこころもしわざも言葉も、みな上つ代の実まことなり」と信じた。



『古事記』冒頭の「天地」をどう読むか。宣長は「アメツチ」と読む。「テンチ」と読むのは、中国人である。「古への心」を理解するには、「古言」を理解せよ。それが学問の眼目である。「高天原」は、空の上にある「天神」たちの住む国である。その「高天原に成りませる神」が、「産巢日」の神である。この世に有るものは、皆この神の「御徳」である。「産巢は生なり」、「日」は「産霊」の「霊」で霊力である、と宣長は解釈する。

「葦牙」のごとく萌え騰がるものによりて、成りませる神は、「宇摩志阿斯訶備比古遲」の神。「宇摩志」は美称ほめ言葉で、「葦牙」のすばらし成長力に、あゝと感動する、その感動がそのまま神になってゐる。自然との共鳴共感の中で神が生れてゐる。宣長は、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迎微とは云ふなり」と説いた。

「神代七代」の神々は、大地を作る神々である。「於母陀流神」は、余すところなく大地が完成した「面足る」、満足した神である。「阿夜訶志古泥神」は、そのことを「阿夜」あゝと驚き、畏れ「訶志古」む神である。

日本の神は古代人のこころの経験であり、こころの中に生きてゐたものであった。

第二日目

(九月八日・土曜日)

合宿の日程は、「朝の集ひ」から始まる。あいにくの雨天のため室内で行った。全員でラジオ体操をした後、澤部壽孫氏(国民文化研究会副理事長)が、短歌鑑賞として、昭和二十年五月に戦死された松吉正資氏が出征前に詠まれた三首連作の歌を紹介し、朗誦した。三首は次の通りである。

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人の思ひにこたへざらめや

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世行くまで

講義 「聖徳太子の御言葉に触れて―憲法十七条を中心に―」

元 神奈川県立小田原高等学校教諭 原川 猛 雄 氏



今から千四百年前の聖徳太子の憲法十七条には、現在でも通用する教へが説かれてゐる。第一条に「人皆覚あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣りに違ふ」とある。これはいつの時代も変らない人間の姿であらう。

太子は、現実の人間の姿をしっかりと見つけた上で、どうしたらよいのかといふ解決の道をお示しになった。どうしたら対立する相手と穏やかに接することができるかといふのは永遠の課題である。意見が違って対立すると、喧嘩にもなりかねない。あとで振り返ると、どうして自分の意見にこだはつてゐたのかと愚かさに気付かされる。第十条で「共に」「是れ」「凡夫のみ」と言葉を強めてゐる点に注意して欲しい。太子は、この世の中の人は、身分の高下、頭の賢愚に拘はらず、「全ての人が凡夫である」と指摘されてゐる。そして誤つたものの見方にとらはれたい、欲に支配されると、人の道から外れてしまふ。だから、「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ」と実に大事なことを説かれゐる。太子は、凡夫のままでは救はれる道、つまり人間らしく生きる道を説かれたと思ふ。

聖人とは、凡夫に徹した人のことではなからうか。己の足らはぬ姿を見つめ、自他の区別なく人々と共に救はれる道を実現したいと精進してゐる人のことだと思ふ。聖徳太子はまさにそのやうな方であつた。お互ひに、至らぬ凡夫であることに目覚めれば、そこに他者との広やかな共感の世界が開けてくる。黒上正一郎先生は、それを「他と共なる生」と表現された。個我の迷執から解き放たれて、お互ひ謙虚な気持ちで接することのできる世界、それこそが、太子の願はれた世界だと思ふ。

伊佐ホームズ(株) 小柳 雄平氏



短歌を創作するといふことは、「豊かな心を育てる」ための修練である。物事を見つめ、その事象の中核を的確に見出し、そして自分の心を見つめ整へて、正確に短歌の定型に言葉で表現する。この一連の作業を日々繰り返すことで、ものごとを見る目を養ふことにつながり、正確な洞察力、判断力が鍛へられる。また身の回りに無数にある、自然の美しさ、ものごとの不思議さ、こまやかな人の心の動きなどにも気づいて感動する心が育まれる。そして、短歌の表現の手法として先人の秀歌を読み味はふことも大切である。これらを通して、国語の美しい響き、様々な心の機微を表す種々の表現に日本人が古代より培ってきた豊かな心の動きを感知することが出来る。

先輩や友人と折々に短歌を詠み交はしてきた中で、右のやうに実感してゐる。たとへ、これまで短歌創作の経験が少ない人も歌は詠める。まづは小さな感動であつても、その一点に深く思ひを留めて自分の感動を正確に見つめて、それを言葉に表現する。人に伝はるやうに適切な言葉を探す。短歌を詠むといふことは、自分の心を客観視することでもあると思ふ。あまり気負わずに、まづは感じたままを詠んで欲しい。

散策(短歌創作)

御殿場の地は海拔七〇〇メートル余であつて、秋の訪れがかなり早いやうであつた。短歌の創作をかねて参加者は「交流の家」の敷地内を散策した。広大な敷地には万葉植物をはじめとして、さまざまな植物が生ひ繁つてゐて、秋の草花がそこかしこに可憐な姿を見せてゐた。あいにくの曇天のもとで、さらには小雨が降るかと思へば、陽が射して、また小雨に見舞はれるといふ天

候ではあったが吹き来たる風は心地良かった。各々雨傘を片手に短歌の創作に取り組んだ。

講義 「日本の国柄―明治百五十年に思ふ―」

三菱地所(株) 都市開発二部専門調査役 青山 直 幸氏



日本の国柄は、歴史学者坂本太郎博士が日本の歴史の特性として提唱された「連綿性」「躍進性」「中和性」の三つの特性で考へるとわかり易い。中でも「連綿性」の中心となつてゐるのは万世一系の天皇である。その天皇が行はれるまつりごとの本質とはなにか。『古事記』の国譲りの一節で建御雷神が^{おおくにぬしのかみ}大国主神に「汝がうしはける葦原中国^{あしはらなかつくに}は、我が御子の知らず国と言依さし賜へり。故汝が心いかに」と問ふ。本居宣長は、『古事記伝』の中で、「知らず」について、「…即ち自他の区別がなくなつて一つに溶けこんでしまふこと」と書いてゐる。

今年、明治百五十年に当る。明治維新とは何か。迫り来る西欧列強に対し、国民すべてが力を合はせて、日本国の独立を守り、内乱を起すことなく諸外国の干渉を排し、近代的統一国家を作つた。この一大変革を伴つた独立運動の原動力になられたのが孝明天皇であつた。孝明天皇は島津斉彬^{なりあきさだ}、毛利慶親^{よしかか}、松平容保^{かたまり}など雄藩大名に御志を御宸翰^{ごしん}や御製^{ごせい}によつて伝へられた。さらに、御妹和宮を正室として迎へた將軍・家茂に対し、「汝、朕を親しむこと、父の如くせよ。其親睦^{しんぼく}の厚薄、天下挽回^{ばんかい}の成否に關係す」と公武が強い絆で結ばれ、君民一体となつて、国難を打開しようとして切望された。孝明天皇の御志は実を結ぶかに見えたが、突然の病(痘瘡か)で崩御。弱冠十六歳の明治天皇はその御悲歎の底から立ち上がられ、「天下億兆^{おくせう}一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、…」と悲痛なまでの御決意をされる。さらに「一君万民」「公議輿論」「万国対峙」「万国対峙」などの時代精神を背景に由利公正などによつて練られたものを御裁可になり、近代日本の国是として天地の神々に誓はれたものが「五箇條の御誓文」である。そして終戦後、昭和二十一年元旦、昭和天皇は「新日本建設に関する詔書」の冒頭にこの「五箇條の御誓文」を掲げられ、

「叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン」と明治維新の精神の継承を望まれたのである。

第三日目

(九月九日・日曜日)

「朝の集ひ」が屋外で行われ、短歌鑑賞では、前田秀一郎氏（山梨大学名誉教授）が、富士山にちなむ歌などを紹介、一同で唱和した。紹介された歌は次の通り。

本居宣長

遠山霞

心あての霞ばかりにきのふ見しふじのねたどる東路あづまぢの空

三井甲之

みんなみにそびゆる富士は雲立ちて見えすもゆかしそのあるあたり

○

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

創作短歌全体批評

国民文化研究会 副理事長 澤部 壽 孫 氏

昨日の雨模様の中の散策で詠まれた参加者の短歌を読ませてもらひ、一所懸命に詠まれてゐることが感じられて、日本の将来は大丈夫だと思つた。お配りした「歌稿」には全員の短歌が少なくとも一首は載せられてゐる。短歌の批評とは他人の歌をじろじろ見て批判するのではなく、作者の気持ちになつてその歌を味はひ、作者の気持ちに最もふさはしいと思はれる言葉を選ぶことである。作者の気持ちに寄り添ひながら適切な言葉をさがすことは、一人が詠んだ歌を全員でまづ味はふことであり、正確な



表現を探究する中で、得難い共感の世界が生れる。

〔「全体批評」の中では、実際に創作された参加者の歌がいくつか取り上げられて、対象を正確に詠むとはどういふことなのか、適切な言葉がさがすとは如何なることなのか具体的に示された。一首の歌の批評を通して共感の世界が講義室に醸し出された〕

古代より私達の祖先が短歌を詠んで心を整へ、思ひを通はせ合ひつつ国を守ってきた。それを「敷島の道」と呼び慣はしてゐるが、私達が短歌を詠むことは、まさに「敷島の道」を踐んでゐるといふことである。自分の気持ちを正確に述べようと務めることは相手の話を正確に聴くといふことの実践でもある。それはまた、現在の大学の学問に欠けてゐる非常に大切なことなのである。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

講話 「亡き師の御言葉」

若築建設(株) 池松 伸典氏

国民文化研究会の源流である旧制一高「昭信会」の頃から活動を続けられてきた高木尚一先生の遺稿集には、「仕事に追はれ忙しすぎるために心の生長をなくしてしまひ、さういふ自分を半ば得意になつてゐる場合が多い」「心が亡びる」ことを嘆く人は少ない」と述べられた一文があった。五十年前の文章であるが、人として生きていく上で最も大切な心の問題をいかに疎かにし



てゐるかと考へさせられる一節だった。現代人は交通機関の発達によって容易に人と会ふ機会を持つことができるが、一方では真の「心の交流、精神の共鳴」の経験は少ないのではないか。

黒上正一郎先生は御著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中で、太子の時代に、中国から仏教、儒教などの思想が渡ってきたが、古代の日本には、例へば「孝の理論」はなかったが、それに「生命をあたふべき内なるまことの力」が備はつてゐたと説かれてゐる。それは家族を残して任に赴く防人の歌から感じとることが出来る。概念に捉はれたままではその真実に触れることはできないのである。

先の大戦開戦一ヶ月半ほど前の「日本世界観大学」（国文研の前身、日本学生協会主催）といふ講座で、小田村寅二郎先生は、当時のスローガンが横行し真実を見失つてゐる現状を批判されて、「思想は、國運を左右する重大な問題である」と訴へられてゐた。この合宿での学びから、学問のあり方がいかに大事なことなのかを心に刻んで欲しい。

全体感想自由発表

感想文執筆を前に、胸中に湧き上がる思ひが次々に発表された。

「合宿で生きる力を貰つた。日本に生れた幸せを感じた」「正確に聞くことの大切さを教へられた」「父・孝明帝を十六歳で喪くして皇位を踐まれた若き明治天皇の『御決意』を知つた」「五箇条の御誓文の深い意味合ひを知つて良かった」「言葉では知つてゐたが『うしはく』と『しらす』の相違の深意を実感できた」「教員を志望してゐるが、日本に生れた幸せを感じさせられる先生になりたい」「学問するとは、日本の国を学ぶとは、どうといふことなのかを合宿中に何度も自分に問ふた」「短歌の相互批評で、自分の気持ちにぴつたりの表現にたどり着いた時はすっきりした」等の感想を参加者が述べた。

閉会式

主催者を代表して岸本弘国文研会員は、「昼食の後、雲が切れて富士山が目の前に雄姿を見せてくれた。そこで『合宿の終る間』[※]

際に富士の峰はしるく立ちたりなんと嬉しき』と詠んだ。合宿に何を求めてやってきたのか、合宿から何をつかんで家路に就かうとしてゐるのか。それを富士に向つて問ひかけ、富士から答へをいただく思ひである。班別研修の中で、講義内容を咀嚼し、自分の勘違ひしてゐるところを友から正してもらつた体験は、生活のどの場にあつても一番大切な人と人との付き合ひ方だと思ふ。皆さんとともに有意義な時間をもたせていただいたことにお礼申し上げたい」と挨拶した。そして、信州大学繊維学部一年（渡辺平祐君の閉会宣言を以て、合宿教室（東日本）の幕は閉ぢられた。

合宿運営

【本部】

運営委員長

若築建設(株)

I B J L 東芝リース(株)

(株)元アルバック

(株)茨城新聞社

池松 伸典

小柳志乃夫

北濱 道

佐川 友一

【指揮班】

指揮班長

I M S グループ本部

最知 浩一

【事務局】

事務局長

国民文化研究会事務局長

磯貝 保博

栗方恵美子

走り書きの感想文

これは閉会間ぎはの一時余で参加者全員に、二泊三日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。



第一班

学問とは自分の心を鍛えること

(Chatterhouse School 二年 柏原永明)

私は八年間英国の学校（小五く高三）で勉強してまいりました。母国を離れて暮らすうち、楽しいこともありましたが、辛い日々を過ごしてきました。何より自分が日本人であることを馬鹿にされたり、時には虐められたこともあります。日本国内でも偏見や理不尽の対象となりました。

合宿の前までずっと憂鬱な気分でも過ごしてきましたが、講義の中で励みとなる言葉を学びました。「学問とは自分の心を鍛えること」小田村寅二郎先生のお教えです。合宿に参加したことで、自分がしなければならぬことを教えて貰えたことに、とても感謝しています。色々教えて下さった先生、共に学んだ仲間と出会えたこともとてもうれしく思います。有難うございました。

強靱なところをもちて目指すべき我が学問を深めていきたいし

合宿で学んだ三つのこと

(東京大学 教養 一年 江上隆介)

合宿で大切だと感じたことが三つあります。一つ目は心で感じることです。多くの物事の本質を掴むために非常に重要なことであることを合宿の中で幾度も感じました、そのためには正確に捉えようとする姿勢や謙虚な態度が必要であるとともに、感じ取ることを最も必要とする短歌が大切だと思いました。短歌創作は困難でしたが続けてゆこうと思います。

二つ目は原典を読むことです。合宿で、古事記、十七条憲法、御製等数多くの原典に触れましたが、原典の魅力は自分の心に感じるものがあちらこちらに存在している点にあると感じました。さらに言えば原典に触れることは江崎道朗先生が仰った「現場を知る」ことに通底するものがあると思います。

三つ目は、様々な物事について「何」「なぜ」と考えることです。学問とは何か、日本とはどういう国か、その歴史をなぜ学ぶのか、を考える機会となりました。

合宿で学びしことの多きこと頭は疲れ心は嬉し

相手の話を正確に理解することの大切さ

(信州大学 繊維 一年 渡辺平祐)

私はこの合宿に参加する前は、「理系だから」「国語は苦手だから」などと言って、古文や和歌から距離を置いたり、興味を示さなかったりして、自分で学ぶ機会さえ遮断していました。しかし参加して、先人から学ぶ大切さや、短歌を創作することの大変さ、そして自分の思っているような形で表現

できた時のうれしさを学びました。また、最も印象に残った講義は江崎道朗先生のお話です。相手の話を正確に理解することの大切さを具体例を踏まえながら教えていただきとても感心したと同時に、自分の中のモヤモヤが晴れて嬉しい気持ちで一杯になりました。個人の間で起こる話のズレや理解度の違いは国同士でもしばしば起こっているのだと痛感しました。これから学んでいく中で、我流ではなく専門家の力をおかりて指導していただき、共に勉強してゆくことが重要だとわかったのでこの機会を利用して前に進んでいきたいです。

班別の皆との会話盛り上がり心の深まる合宿教室

和歌相互批評が嬉しかった

(明治大学 政経 四年 江崎光太郎)

この合宿では心を働かせる学問ができてとても有意義でした。青山直幸先生の御講義で取り上げられた「明治維新の宸翰」を心を働かせて読むと、十六歳の明治天皇がいかに大きなプレッシャーと向き合い、国の舵を取ってきたのかを感じる事が出来、今回初めて自分も国民としてしっかり皇室を支えたいと思いました。また和歌相互批評も大変印象に残りました。自分の歌に対し何を表現したのかを一生懸命考えしてくれる。これほど嬉しい事はありませんでした。大学で色々な人と付き合うようにはなりませんが、今回の様に自分の感情を素直に吐露することは滅多にないからです。この体験を

カメラ・レポート1



開会式。筑波大学大学院二年の横川翔君(右)の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長(左)は「真に独立国家として日本を再建するために、道標となる日本の古典に触れて、先人が何に生きがひや価値を置いてきたのか学んでほしい」と挨拶した。

通して自分が如何に正確に言えていないか、聞き取れていないかを知ることができました。本当に勿体ないなと感じましたので、これから地道に学問を重ねていきたいと思えます。合宿で心を込めて語りひし仲間と別れる時の悲しき

自分の学びは間違っていなかった

(佐賀大学 文化教育 四年 藤近晃久)

江崎道朗先生はご講義で自分の心を鍛えて行くことが学問と言われましたが、ここ最近の自分は「学問」をしていなかったと痛感しました。学問に励めば励むほど、自分という存在がいかに未熟・未完であるかを知るとの小田村寅二郎先生の言葉もお聞きして、やはり日々読書を通して先人の叡智に学んだり短歌の修行を積むことが重要であると思いました。学問においても特に江崎先生が繰り返言われた「正確に聞く」という姿勢を心がけることが大切だと感じました。また先生は、山田輝彦先生の御言葉を引用されて、正確に聞く力がしきしまの道(短歌)によって鍛えられることを実感をおこめて伝えられました。このことは一つの自信になりました。江崎先生のように、今の時代を切り拓く力になることを知ったからです。今を生きる大学生として、自分が行ってきた学びは間違っていなかったとの確信を持ちました。

学問を日々重ねつつ日の本を正しく導く学生とならむしきしまの道を踏むこそ難しき時代を拓く力を信ずる

「しらす」に日本の国柄を感じた

(株) IHIエアロスペース 内海勝彦

久々に学生班長を務めさせて戴いたが、班員達の真剣に学ばんとする熱意と真摯な姿勢に、却ってこちらも新鮮な気持ちで取り組むことができた。

講義では江崎道朗先生の学生時代での小柳陽太郎・山田輝彦両先生との出会いの話に感銘を受けた。「いまの自分が理解できないだけで、素晴らしい叡智が先人の文章・発言には込められている」「正しいと思っただけで聞く必要はないが、正確に聞くように務める」との教へを今後の指針としたい。また、青山直幸先生のご講義「日本の国柄」での、天皇のまつりごとの本質を表す「しらす」についての本居宣長の説明「みな自分以外にある他の物を、我が身の内にうけ入れて、気持の上で、他の物と我が一つになること」を読み、改めて宣長の見識の高さに感服すると共に、この姿勢が聖徳太子の言はれる「自他の二境を存せず」であり、「君民一体」の日本の国柄そのものだと感じた。

池松伸典運営委員長の講話を聴きて

忙しき合間の中にも歌を詠む時を作れと友は語りぬ

今回出会った一班諸君との交流をつづける

池松伸典運営委員長が講話の中で「合宿の感動も日が経てば薄れる」ことを話されたが本当にさうだと思ふ。そんな自分の心にどう問ひかけ、励ましてゆくか、それが合宿直後からの課題であらう。

昨夜も今林賢郁理事長と二人で語り合ふ時間を持ったが、今後の合宿の継続について何も妙案はない。ただこれまでの活動を地道に継続し一人でも二人でも心ある学生・青年との出会ひを心待ちにするのみである。

まづ今回出会った一班諸君との交流をつづけることも最優先の課題であらう。

合宿の終る間に富士の嶺はしるく立ちたり何とうれしき

大変貴重な時間をいただいた

(伊佐ホームズ株) 小柳雄平)

班付として加はりましたが、皆とても良い学生で自分の気持ちを正しく表現しようと、又、相手の心を正しく聞きとらうとしてゐる姿は、まことに清々しく、たのもしく思ひました。これからも仲良く共に励んでいただきたいと思ひます。

短歌導入講義を担当させていただきましたが、合宿前から運営委員長の池松伸典先輩、また、指揮班の最知浩一先輩、北濱道先輩、佐川友一先輩。またわざわざ山梨から指導にと来て下さった前田秀一郎先輩と何度も顔を合はせたり、メー



オリエンテーション。池松伸典合宿運営委員長(右)は「講師のお話とともに班員の言葉にも耳を傾けて、心で感じてほしい。一つでも心に残る言葉を持ち帰ってほしい」と呼び掛けた。最知浩一合宿指揮班長(左)は、合宿生活を送る上での諸注意を説明した。

第二班

ル上で内容を修整していただき有難うございました。穴井宏明兄、高木雅史兄と友人も講義を聞きにと参加して下さって、何とか乗り切ることが出来たといふ思ひです。

しかし今思へば大変貴重な時間をいただきました。なかなか普段の生活の中で学問をしてゐなかつたので、これを機に日頃より少しづつ深めてゆきたいと思ひます。お互ひの心を正しく解せむと班別研修に友ら励みぬ

江崎道朗先生と和歌相互批評の感動

(福岡教育大学 教 四年 堤 正史)

江崎道朗先生の講義で、国文研の二人の先生、小柳陽太郎先生と山田輝彦先生から、「先人の叡智にふれ、学ぶこと」「正確に聞くこと」を教わつたと話された。私が驚いたのは、それを受けた江崎先生は、その言葉を信じ、そして、ことあるごとに両先生に教授をいただこうと食らいつたことであつた。この経験を通して、江崎先生は今や、日本の政治の最先端で、仕事をされているのだと感じた。

次に和歌相互批評で私は、最初、一輪の花を見て、それが小さいながらも、懸命に生きる様を感じて、「健気にも咲く」と詠んだ。しかし、相互批評で、自分が見た花の様子を、よ

り自分が見た通りに読むことを先生方と共に努めた。その結果「健気」という言葉はなくなつて、かわりに「地を覆ふ苔の中にも一輪の白く小さき花の咲きたり」となつた。不思議なことに、私の感じた花への思い、その生命への感動が、情景を詠んだだけに、伝わってくるではないか。ここに私は歌の本質、すなわち、見たものに対する感動は正確に言葉にすれば伝わるという事を実感した。

江崎道朗先生のご講義を聞きて

師の言葉しかと噛みしめ行動する大人うしの生き方まねて生きなむ

江崎道朗先生と聖徳太子の教え

(皇學館大学 文 三年 小野寺崇良)

私は今回で三回目の「合宿教室」参加となつた。講師の江崎道朗先生は国際政治等に関わる発言の中で、学生時代の国文研での学びがどう活かされたのかお話された。「相手の話を正確に理解すること」ここを中心に、今でも大いに活かされている根本的な学びを、和歌や古典の学習、それに国文研の先生方の本を一字一句を書き写すなどして、自らのものにしてきた江崎先生の姿勢を知り、感銘を受けました。「日本を良くするため、叡智を持った方々に勇気を以つて教えを請う」と仰つた先生の意見には、私自身学びの活力を頂いた。

また、聖徳太子の憲法十七条では、第十条の「我独り得た

りと雖も衆に従ひて同じく^{おこな}挙へ」との言葉に強い印象を持った。

私自身の行動や大学での体験と重ね合わせ、反省させられたからだ。班別討論で前田秀一郎先生は「憲法十七条も、それを痛感する出来事がないと忘れてしまう。それを我々がいつ痛感するか」だと仰った。五年後、十年後、人生経験を積んだ後、その時の私は、古典の何の文章に感動するのだろうか。

御殿場で語り学びしふることの教へを糧に学び続けむ

憲法十七条と日本の国柄について

(佐賀大学 理工 一年 衛藤良太)

憲法十七条の第十条の「共に是れ凡夫のみ」の意味について、共に至らぬ凡夫であるということは、自分の体験を伴って痛感することがないと忘れてしまうというお話がありました。自分はまだ誰もが凡夫であるという同胞感を感じることができていないということに気づきました。自分の解釈の仕方を言い、どのような文のとらえ方があるのかしか見ようとしませんでした。聖徳太子のお考えについて自分なりの感想を実感を持つて言うことが出来なかったことが心残りです。

また、青山直幸先生の「日本の国柄」についての研修の時、孝明天皇や明治天皇の御製やご決意などを読み、天皇陛下がいかにか国や国民のことを思われているかを感じました。また、

カメラ・レポート3



講義。評論家の江崎道朗先生は「日米同盟の行方と中国への姿勢」と題して、トランプ米政権が対北朝鮮政策を巡り抱へてゐる課題を解説。その一つは、「朝鮮半島と南西諸島・台湾の二方面の危機に日本が対処できないこと」と述べた。本合宿教室で学んだ経験や出会いが、自らの学問の実践とつながってゐるとも語った。

天皇陛下は国民を思っているだけでなく、神に祈っているというお話を聞き、天皇陛下が祈られている以上、国民もそのお祈りにお応えするための努力をしなければならぬと思われました。日本の国柄とは神に祈られている天皇陛下と、そのお祈りにお応えしようとする国民があつてのものではないかと思ひました。

散策（短歌創作）から戻りし折

雨は上がり富士をば見むと振り向けど見ゆるは麓の岩肌ばかり

江崎道朗氏の率直さ見習いたい

（筑波大学大学院 二年 横川 翔）

講演の主題であつた国際政治のことは、正直なところ全くと言つてよいほど分からない。ただ、江崎道朗氏の率直な姿勢には習うべきところが多いと感じた。具体的には、個別で質問をしたとき、評論家で果たして食つていけるのかなどという卑近で礼を失したことを尋ねたにもかかわらず、江崎氏は全く言葉を濁さずにお答えくださった。私も斯くありたい。信用や信頼というのはそういうところから生まれるのかも、しれないと思つた。

秋雨のぼつりぼつりと降るなかを吾れは来にけり御殿場の地に

言葉の伝統を学んで

（株）ミラポ 増田慎一

今まであまり言葉を意識して考えたことはなかったのですが、今回初めて合宿に参加して、改めて我が国の先人が古事記や万葉集で何とかして日本固有の言葉を残そうと努力し、大切に守り続けて来た「言葉という伝統と文化」の有難味を知ることが出来ました。今後は他人の言葉を正確に聞くよう努め、読書では熟読・精読し、和歌創作で自分の感情を何とか言葉で表現することで、より言葉の伝統を身近に感じながら生きたいとも思うようになりました。また班別研修では、自分一人で絶対に読み飛ばしてしまふ文章も、仲間と一緒に感想や意見を語り合う・深め合うことで難解な聖徳太子の憲法十七条をより身近に感じることができ、合宿を通して多くの発見がありました。

友と学びて

日の本の歴史文化を語りける友との時はあに忘るまじ

緊張感とともに充実した時を過ごせ

（埼玉県庁企業立地課 飯島隆史）

二泊三日といふ従来に比べると随分短い合宿教室でありましたが、十分充実した時を過ごすことが出来ました。池松伸

典運営委員長、最知浩一指揮班長はじめ運営スタッフには誠にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

特に何年か振りに「男子学生班長」を仰せつかり、充実した合宿教室を送ることが出来ました。ただ参加するだけでなく、班長は気を抜くことができず、久しぶりに良い経験を致しました。

尚、何としても参加学生が少なく、何か抜本的な改革を考へて行かねばならないと切に思ふ次第です。

秋雲は高く流れて富士の峰青きみそらに聳えてぞ立つ

「共に是れ凡夫のみ」の言葉にふれて

(全日本学生文化会議 清川信彦)

この合宿を通して心に残った言葉は、聖徳太子の憲法十七条の第十条の「共に是れ凡夫のみ。(略)我独り得たりと雖も衆に従ひて同じく挙へ」という言葉です。学生指導も五年目となり、「自分が学生を導かねばならない」という力みがあり、このままではいけない、自分が変わらねばと悩んでいました。しかし、この言葉に触れて、学生の話にもっと耳を傾けてよく聞こう「共に是れ凡夫のみ」の姿勢で学生と共に課題を乗り越えていこうという気持ちになりました。

また、よく聞いて共に進んで行くという憲法十七条の精神を思った時、今上陛下のお姿が思い返されてきました。誰よりも自分がよく知っているなどという傲慢な姿勢でなく、

カメラ・レポート4



班別討論 初日の講義の後の班別討論では、講師を務めた江崎道朗先生も加わり、班員からの質問を受け、真摯に応へられてみた。

たいです。

国がらを守り給ひし先人の思ひ受け止むる学問を積まむ
うるはしき大和言葉をつむぎゆきしきしまの道を踏み続けた
し

「感じ取る」気持ちがなければ神髄はつかめない

(長崎大学 教 四年 津田真木)

三日間を通して、今の自分にとつて一番大事なものに気付
きました。それは「感じ取る」といふ気持ちです。

(高木尚一先生の言葉に)「小林秀雄先生が言つてをられる
やうに「感じ取る」といふ気持ちがなければ、その神髄はつ
かめないと思ひます。私共国文研の運動も、ともすれば紙一
重の差で概念的なものになつてしまふので、真実に触れ合ふ
といふ機会を失つたまま上すべりしていくと何のための運動
かわからなくなると思ひます。」この言葉が今の自分の心にど
んどん迫つてきて、私の心をグツと掴んで、今後も離さない
と思ひます。(紙に書いて部屋に貼ります)やはり、どんなと
きでも言葉に立ち返り、そのとき心が動いたことが蘇つてく
るような生活をどれだけ習慣化できるかということが今の自
分に試されていると思ひます。この一か月忘れかけていた「感
じ取る」という心を取り戻すことができました。

「感じ取る」気持ち忘れず事に触れ向き合ひつづくる我であり
たし

カメラ・レポート5



講義。國武忠彦氏は「日本のこころ『古事記』」と題し、天武天皇が、古語を筆録する形で古事記を編んだ動機を、本居宣長の説を通して語った。古の日本の言葉は「朴(すなほ)」であり、それは上つ代の実の姿を伝えてある。グローバル化の中にある時代だからこそ、日本特有の文化を自覚することが必要だと説いた。

心に残った十六歳の「明治天皇の御決意」

(長崎大学 教 四年 桑原由夏)

今回が、二回目の参加となりました。三日間の学びと多くの方との語らいを通じて「やっぱり学ぶのはこんなにも楽しいものだ!」と、一つ一つの講義や班別研修で心に響く言葉や歌に出会えた時に気持ちが大きく高まるのを感じました。特に心に残ったのは、青山直幸先生の御講義の中で紹介されました「明治天皇の御決意」の文章です。御歳十六歳にしてなんでこんなにも重く苦しく、しかし強いご覚悟が伝わる御言葉なのだろうと思いました。天皇として、たったお一人で日本を、日本国民を背負われることへの責任、恐れ、不安。けれどもそこには「国民全員」というざっくりしたものではなく、「国民一人一人」に細やかに目を向けた深く限らない愛を感じました。陛下がどのような思いで国民に御心を寄せてくださったのか、どう日本の行く末を見ていらつしやったのか、御製や御文章にもっと触れて、少しでも歴代天皇の御心を感じていきたいです。天皇陛下の御心を知るだけでなく、どう私も生きるか、決して天皇陛下を孤独にさせず、皇室が永遠に続くためにはどうするか、これからの行動を考えたいです。

先人たちも仰ぎし富士に見守られ日本の心を学ばはうれしき雲の上がりて富士山の全景を仰ぐ

晴れ空に雄々しく立ちぬ富士山を三日目にして見るはうれしき

天武天皇の命で作られた古事記

(奈良県明日香村議会議員 柳谷信子)

突き上げるような感情が沸いてきて、参加させて頂きました。富士の麓で国文研に集う聡明な皆様と共に過ごせた事は、とても嬉しかったです。日常知らなかった古代からの日本の歴史、文化、国柄を教えて頂き、心が揺さぶられるほど感動しました。國武忠彦先生の日本の心「古事記」が、天武天皇の命で作られたことすら知りませんでした。私の今住む所は、明日香村の岡、天武天皇の飛鳥浄御原宮の辺りにあるのです。天武天皇が、当時、中国化する中で古代の日本の心、言葉、歴史を守ろうとされていた事も全く知りませんでした。明日香村では、今、村をあげて英語教育に力を入れ、古事記、日本書紀、万葉集には、ほとんど力を入れていない現状です。今回、初めて短歌をご指導頂き、大和言葉の豊かさや奥深さを感じる事ができました。この豊富な言葉から自分の心につくりくる言葉を選び、リズムよく歌う作業は、人間一人ひとりの心のうちの表現方法として素晴らしい文化であると同時にこの歌を詠み合う人々の心が一つになる感情を共有できる事、相手を思いやり理解し合えるのだ、それが日本文化なのだと言ふに落ちた事、先人の心を共感できた事に心から喜び

を感じました。

うるはしき大和の言葉読みゆけば 古へ人の心しのばゆ

散策（短歌創作）の折に

雲晴れて富士の麓に朱々と輝くこぶしの実をみつけたり

「後生畏るべし」学生さんの感性に嬉しく

（公財）郷学研修所・安岡正篤記念館 嶋田元子

今回で三度目の合宿参加になりますが同じ班の学生さんが皆すっかりした考へ、良い感性を持ってみたことに驚きと共にとっても嬉しくなり、楽しく充実した時間を持つました。「後生畏るべし」いづくんぞ来者の：」と論語にあります、偶々皆さん教育学部で教育の大切さを充分理解してゐる人たちでしたので、このやうな先生に教はる子供たちは幸運だと思ひ安心もできました。

講義の内容については、同じもの（例へば聖徳太子、古事記、御製…）を扱ってもその年に担当される講師の先生の着眼点の違い（当然かもしれないませんが）、非常におもしろさを感じました。平素のお互ひの研鑽の成せる業かと痛感した次第です。

「短歌とは己を知りて他人を知る相互理解の最良の方法

カメラ・レポート6



講義。元 神奈川県立小田原高等学校教諭の原川猛雄氏は「聖徳太子の御言葉に触れて」と題して、太子が憲法十七条に説かれてゐる教へをひもといた。「お互ひに、至らぬ凡夫であることに目覚めれば、そこに他者との広やかな共感の世界が開けて来る」と語った。

何回も子供達と朗誦した「古事記」の成りませる神

(野々村悦子)

二回目の国文研の合宿に参加させていただき感謝申し上げます。

今回は女子班の学生さん達の国に対する思ひが熱く日本人として生まれたこの国をよりよく自分達で築いて行くことと確固たる志を持つてをられることに感心いたしました。難しい国柄も「しらす」と云ふ言の葉を理解し自分のものとして自分の言葉で皆様に伝えることができてをられ、頼もしいと思ひました。

私は國武忠彦先生の「日本のこころ『古事記』」の講義が一番自分にはよく理解できたと思ひます。古より伝へられたる我が国最古の歴史書の神々のお産れになるお話しの中の成りませる神、私は以前子供達と何回も声を出して朗誦して行くうちに子供達も私も何の不思議もなくああ本当にこの物語りのまま国生みはなされ今の日本があるのだと信じて疑ふことはなくなりました。この合宿を運営下さいました皆様に感謝申し上げます。

うた詠むはおのが真心伝へんと現はす言の葉いのちなりけり

改めて気付き考えさせられた憲法十七条・日本の國柄

(日本生命保険相互会社 野々村美紀子)

終わつてしまえばあつという間の合宿でしたが毎日の御講義の内容がとても濃く、充実した日を過ごせたと思ひます。

憲法十七条や日本の國柄等今まで知らなかったこと、全く意識していなかったことに改めて気づき考えさせられました。日本という國に生まれ日本人としてこの國の素晴らしさ、心の在り方をもつと学ぶべきだと思ひました。常におだやかな心で、また、連綿と続いてきたこの國の良さを今回の御講義を踏まえ文献を改めて読み深めていきたいです。

班別研修では、大学生の方々の真摯な姿に心をうたれ、この國のことを学びたいという熱意に圧倒されました。良い人々、良い文章に触れることが人間を高めるとのお話もあり、素晴らしい合宿だったと思ひます。日本人としての心の在り方は普段の生活だけでなく、仕事等全てのことに通じるはずで、貴重な時間を過ごせたことを今後の自分に活かしていけるよう努力しようと思つております。

あふれたる日の本に生ふる喜びを述ぶる若人まぶしかりける

他人の話を正確に聴くことの大事さ

(元三菱重工業(株) 島津正数)

今回は女子班の班長といふことを開催日の朝聞き、少々面喰ひましたが、班員の皆さんのご協力のお蔭で中身の濃い班運営が出来ましたことに感謝いたしてをります。

今回の合宿で特に強烈な印象が残りましたのは、江崎道朗先生のご講義と青山直幸先生の「日本の国柄」のご講義でした。江崎先生は冒頭「今日の私があるのは国文研の小柳陽太郎先生と山田輝彦先生のお蔭である」「正しいと思つて聞く必要はないが、正確に聞くように努める」であった。江崎先生は、正確に聞くために先人の書かれた本を二冊手書きで写されたこともある。更に深く理解するために小柳・山田両先生に分かるまで質問攻めにされたこともあると述べられた。江崎先生の講義はまるで合宿導入講義であった。それ故、その後の班別研修では、班員は、各講義についてどう正確に聴いてきたか、心に残った言葉は何であったかを確り述べてくれ、誠に意義深い合宿となりました。

班別研修で明治天皇の御製「月」を読み

御父君を偲ぶる歌身に染みておもはず吾がほほ濡れにける
かな

信じることは伝はるもの

(三菱地所(株) 都市開発第二部 青山直幸)

今回の合宿は、二泊三日の短い日程であったが、非常に密度の濃い合宿であったと思ふ。初日目の江崎道朗先生の御講義は、実に心に残る内容であった。ご自分の現在の活動の源泉が、小柳陽太郎、山田輝彦両先生の教へにあることを話されたことが、より参加者の意識を高めたやうに思ふ。ことに、



短歌創作導入講義。伊佐ホームズ(株)の小柳雄平氏は「短歌を創作するといふことは、豊かな心を育てるための修練」と述べ、「先づは小さな感動であっても、その一点に深く思ひを留めて自分の感動を正確に見つめて、それを言葉に表現してほしい」と説いた。

事実を正確に調べることに、相手の気持ちも正確に聞くことの大切さを述べられたことは、多くの参加者に感銘を与へたことと思ふ。

私は二日目の夜の講義を担当し、「日本の国柄」といふ題でお話をしたが、舌足らずで、十分に意を尽くしたとは言ひ難いが、参加学生が、五箇条の御誓文に込められた「明治の精神」に触れ、孝明天皇の御志に涙を流して感動してくれたことは、私にとって大変嬉しいことであつた。信じることは、伝はるものだといふことを実感した。例年に比べ、短歌班別相互批評の時間が長く、じっくりと相互批評に取り組めたことは幸いであつた。批評後の短歌を詠む学生の表情が、さはやかであつた。

朝のつどひにて

おほひたる雲切れ初めて富士山のうす青き峯現はれて来ぬ
朝まだき吹きくる風に山すその雲は静かに流れゆくなり
流れゆく白雲見ればみ友らと今日は別れとの思ひ浮かびく

第四班

大学生の参加者を増やしたい

(元 (株) 講談社 藤井 貢)

久しぶりの参加で、忘れかけてゐたことを思ひ出さしめら

れた。講義を聴き班別討論をする基本的な合宿の流れが懐かしく、厳しい合宿が続けられてゐるといふ安心感を持つ一方、参加者とともに学生数の圧倒的な減少は、愕然たる思ひである。大学の先生、高校の先生を説得し、大学生の参加者を最小でも百名は確保できないものか。一名の参加でよいじゃないかといふ声も聞いたが、国文研究会員の合宿教室になつてしまふ。続けることに意味はあると思ふが、勧誘活動の方法論は再検討の余地があると考へる。日程は、二泊三日だと慰霊祭、夜の集ひを割愛せざるを得ない。三泊四日以上の復活を望む。身をつくし心つくして一人でもこの合宿に誘はんと思ふ

「しらす」「おほみたから」という言葉が心に残つた

(元 私立高校副校長 永井敏勝)

ご講義を聞いて、「しらす」と「うしはく」の違い、「おほみたから」という言葉が心に残りました。日本では、天皇の民を「おほみたから」と呼んでいます。これは、究極の民主主義と思ふ。「しらす」という言葉で天皇の統治が表されていることを、若者に伝えていきたいと思ひます

我が国の最高権威は、天皇陛下です。来年、新しい元号になります。運転免許証を西暦にする動きもあります。このままでは、時間の問題で西暦表記のみになるかもしれないと危惧しています。

また、コミンテルンについての本を書かれている江崎道朗

先生にお会いできたことは、私にとつて感動でした。この合宿は、いろんなことを考える機会になりました。

ふるきこと学ぶ友とのこの五年やまとしまねの光をさがす

「正確に人の話を聞く」ことの大切さを改めて学んだ

(一社) 日本港運協会 久米秀俊

江崎道朗先生のお話して、米国は軍事、技術、インテリジエンス、外交、経済を一体として考へてあるといふ DIME の姿をお聴きし、眼から鱗が落ちた思ひだ。日本の経済力を低下させないことは、日本の経済のみならず、国防上も重要であることが理解できた。

江崎先生は、「正しいと思つて人の話を聞くのではなく、正確に人の話を聞く」といふ山田輝彦先生の言葉を紹介された。どんな考への人とも話をし、ダイナミックに活動される先生の基とされてゐることであり、私自身としても大切にしたい。また、原川猛雄先生の聖徳太子の十七条憲法のお話を聴き、日々の現実の生活に、長年培つてこられた学びが活かされてゐることをうかがひ知ることができた。

原川猛雄先生のお話をお聴きして

ユーモアを交へ話さるる先輩の話しにをのづと引き込まれけり

生活に聖徳太子の言葉の活かしこと感ぜらるるかも氏のお話しに

カメラ・レポート 8



散策。二日目の午後、短歌創作導入講義後に、参加者は屋外にてヤマハギやツルリンドウなどの草花や昆虫を見つけるレクリエーションを楽しんだ。そこで得た題材などを基に短歌創作に取り組んだ。

日本の国柄について改めて考える機会をいただいた

(元 座間市立中原小学校教諭 松本洋治)

合宿全日程参加して、全ての中で学ぶことがありました。江崎道朗先生のご講義では、「人のことばを正確に聞く」ことを山田輝彦先生、小柳陽太郎先生から学び、実践されていることを学び、私もこれから実践していきたいと思いました。他にも世界情勢の分析について、自分も日頃やっているつもりでも先生の分析とは隔絶の感があると思いました。

青山直幸先生の講義では、日本の国柄について改めて考える機会をいただきました。「五箇条の御誓文」の時の明治天皇のご覚悟、終戦時の昭和天皇のご覚悟など改めて知ることができました。他にも色々とありましたが、普段からの学習に活かしていきたいと思います。有難うございました。

原川猛雄先生のご講義を聞いて

聖徳のみことばと語りかく年月かけて学びしことを

自らの家族のこともあげて太子のことばにせまりゆくかな
な

聖徳の真の生き方示されて改めて学ぶ道求めたり

自分がパワーアップした心地がしてゐる

(東京駅前クリニックス 北崎伸二)

私は、東京駅前でクリニックスを開業してゐる。その外に国文研の友人のお世話様で札幌で職を得てゐる。その札幌で地震が起きた。六日のことだ。幸い飛行機が七日に飛び羽田に着いた。自宅に着いたら日付が変はつて一時になつてゐた。

合宿に参加するのは身体機能的にきついかなど思つた。しかし、参加し、山を下りようとする今、自分がパワーアップした心地がしてゐる。合宿とは、さういふところだ。

赤き尾根形変へつつ伸びてゆく夜明けの空の開きゆくまま
ピーク五つ頂きに並び白雲の前にてたり御殿場の富士
白旗雲かかれる峰の山すその闇の深さのうすれゆくかな
うすれゆく闇の深さよその奥の沈む緑に胸とどろきぬ
残雪をふところに抱く尾根すぢの三つ走りぬ頂き向きて

十七条憲法を詳しく調べたい

(日本大学名誉教授 夜久竹夫)

原川猛雄先生のご講義を関心を持ってお聞きしました。

私は、現在大学で教科教育の授業をしていて、その中の心構えの話題の中で「以和為貴」という言葉について、「和(日本)を貴ぶ」との意味であると話しています。原川先生のお話を聞き、「和」という言葉にこめた聖徳太子の思ひの深さを感じました。

合宿後に、十七条憲法について詳しく調べたいと思つた次

第です。

そびえ立つ富士のふもとで日の本の国柄につき字が楽しさ

精進を重ね死ぬまで学び続けたい

(元 富士通(株) 古賀 智)

厚木での合宿以来、五年ぶりの参加でありました。その間に五歳歳をとった譯でありまして、老いて学ぶ事の意味を少しばかり考へるやうになりました。「老いて学べば即ち死して朽ちず」と申しますが、この「死して朽ちぬ」のは我が身ではなく、我が精神なのであります。それが永遠の生命を得て、未来永劫わが祖国に留まって、将来の我が同胞の記憶の中に生き続ける事が「死して朽ちず」の意味であると思ふ譯であります。その為にも、さらに精進を重ねまして、死ぬまで学び続けていきたいものとあらためて決意いたしました。

いただきました資料は、いづれもまことに良くまとまったものでありまして、読みっぱなしにせずに将来に亘りまして活用したいと考へてをります。

同胞の意識たかめてもろもろの祖国の危機に備へてもみむ

先生方のお話しを聴き学び直す機縁を得た

(元 神奈川県立小田原高等学校教諭 原川 猛雄)

今回は講義を担当しました。責任を果たせたのかどうか心

カメラ・レポート9



講義。三菱地所(株)都市開発二部専門調査役 青山直幸氏は、「日本の国柄—明治百五十年に思ふ」と題して語った。天皇のまつりごとの本質は「自他の区別がなくなつて一つに溶け込んでしまふ」といふ意味である古事記にある「知らず」といふ言葉に表れてみると説き、それは明治維新の精神にもなったと説いた。

もとないです。ひとまづ無事終りましたのでほっとしてゐます。発表までにお世話になった太子会のメンバーには感謝の気持ちで一杯です。

江崎道朗先生のお話しではあらためて日本の置かれた状況の厳しさを、國武忠彦先生のお話しでは古代の自然に随順して生きてゐた人々の心を伝へる古事記の大切さを学びました。また、青山直幸先生のお話しでは孝明天皇から脈々と受け継がれる大御心の系譜を具体的資料に基づきあらためて見直すことができました。今後もしっかり学び直していきたいと思ひます。

池松伸典兄をはじめ合宿を運営されてきた方々には感謝申し上げます。いろいろな人の縁の下の支へがあつてこそ実現された合宿であると思ひます。

ひるがへる国旗はたの向かうにあざやかに富士山見えて心ずがしき

第五班

日本文化の価値継承を

(辻本泰久)

短歌創作だけでなく、原川猛雄先生の「十七条の憲法」のご講義後の班別研修においては、戦後に於ける青年の教育の

こと、安倍総理のこと、小柳陽太郎先生の「名歌でたどる日本の心」のこと、福岡県立修猷館高校出身の人が何故多いのか等々、色々な事を意見交換し、ご教示を頂くことができしたのには、誠に貴重な時間でした。

肝腎の参加学生数が少ないことも伺いましたが、このような貴重な活動が、関東におきましても何とか継続し、かつ発展を致しますようにお祈りいたしております。日本文化の価値を継承してくれるのは、若者しかいない訳ですし、この文化を担つて来た老人側の自覚と責任も大きいかとは思いますが、このバトンタッチに果たす貴会の役割は大きいものと考ええる次第であります。色々とお難うございました。

日本人として歌を詠めるようになりたい

(渡邊裕子)

会場の交流の家にようやくたどり着いたがすぐに会場が判明せず、十五分ばかりウロウロ。矢印なりともの標示をして戴きかかった。聖徳太子の「十七条の憲法」、正に人間の社会に於ける当然の事柄なれど、常々、何も考えず勝手に生きている自分を痛感、猛省しきり。短歌を詠むことの難しさを覚悟していたものの、本当に難しかった。小柳雄平先生もメールにて和歌の指導を受けられたとか。私も一応日本人ならば、歌を詠める人間になりたいものだ。

壇上に立ちたる雄平氏の顔に亡き師はなの君の面影さがす

日本の本来の姿を若い人達に伝える

(池田秀子)

初めて「日本の心」を学ぶ会に参加させて頂きました。

私の学び育った時代は、自由平等を旗印にかかげた戦後の教育制度のもとでした。国民文化研究会の存在を知ったのは六十歳を過ぎてからでした。聖徳太子の時代からの日本の本来の姿を、今の若い世代の人達に伝えることの大切さを痛感致します。この会の御発展を心よりお祈り致します。ありがとうございました。

聖徳太子の御言葉、興味深く

(浜崎祥江)

聖徳太子の御言葉に触れて、大そう興味深く聞かせて頂きました。資料も分かり易く、大切に保存させて頂きます。

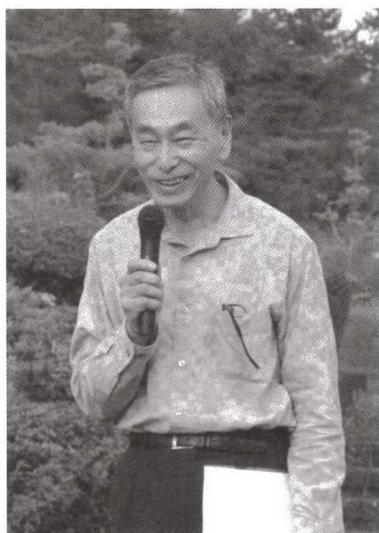
和歌のご講義、散策、和歌作成と、楽しく有意義なひと時を過ごすことが出来、感謝しております。

和歌をつくりたい

(坂本民子)

最近感動することが少なくなっている。講義をうかがい、

カメラ・レポート 10



短歌鑑賞 朝のつどひの中で、短歌鑑賞が行はれた。二日目は国民文化研究会副理事長の澤部壽孫氏(右)が戦死された松吉正資さんの歌を、三日目は山梨大学名誉教授の前田秀一郎氏(左)が本居宣長と三井甲之の歌を紹介し、参加者とともに朗誦した。

これを機に、和歌をつくる生活(出来るかどうか?)をしたい。
つくろうとすることで、豊かな心が育ち、日常生活で感動
するもの、良いものが自然に目に入るようになることを期待
して。先ずは、古来の名歌に親しみたい。

講義を聴いて

喜寿の夏はじめて学ぶ和歌の道恥をしのんで詠むこの一首
感動を求めて日に一首詠まんとす九月八日は我がルネッサ
ス

日本のこと、もつと学びたい

(河口和子)

始めて参加させていただきました。聖徳太子の「憲法十七
条」のお話、とてもよいお話でした。日本に生まれ、年齢と
ともに日本的なこと、習慣、すばらしい中で生活をしていて、
不勉強ですが、もつと学びたいと思います。ありがとうござ
いました。

雨に打たれ富士の裾野に秋草のけなげに咲けば命かがやく

日本語の表現学ばねば

(谷藤伸子)

短歌は全くの初心者にて、「作らねば」と思う気持ちで一杯
でしたが、珍しい秋草を見つける事により、素直に表したい

気持ちに変化した事に自分でも発見の想いです。何げなく過ご
す日々をもう少し丁寧にまわりを気にする目を持っていく事、
日本語の多岐にわたる表現を改めて学ばねばと考えさせて頂
く機会となりました。

学生の参加者が少ないとお聞きし、又、班に分かれての意
見に「将来のリーダー」についての話を聞き、最近は「特
化した」方向性を取る方が、意欲につながる傾向と考えます
ので、「新しきリーダー像とは」として、リーダーになり得る
人物を創るセミナーとする事でもあっても良いかと考えまし
た。世界に出ても日本をどう伝えるのか、日本を知らずして、
世界を相手に意見を言えないのではないかと思います。

しつかり日本を知り、世界に胸をはれる日本人となろうと
呼びかけたいです。

国民文化研究会

全国規模の合宿教室を望む

(元 日商岩井(株)エネルギー本部副本部長 澤部壽長)

先づ池松伸典運営委員長、小柳志乃夫兄、内海勝彦兄、最
知浩一指揮班長、北濱道兄、佐川友一兄に深謝申し上げます。

合宿参加者全員の力が協せられ見事に恙無く合宿教室が終
了したことを感謝します。学生の数の減少が気になります、

やはり全国規模（東西分けず）に合宿教室が望まれます。小

手先に走らず効果的な方策を皆で検討すべきと思ふ。

今よりは歌を詠まむと若き学生壇上に立ち言へば嬉しき

学生の数は少なくなりましたが合宿の灯はゆめ消やすまじ

誤れる思想とたかひ日の本を守り来たれる我が先輩は

学び舎に新たな学風興れとの切なる思ひ湧きて止まらずも

この夏も皆の力の協せられ見事に成れる合宿教室

先人の命と思ひのつみ重ね

（元 拓殖大学日本文化研究所 客員教授 山内健生）

内容のある合宿教室であった。講義には各講師の生きる姿勢に裏打ちされたものと拝されて、単なる知識の披瀝ではなかった。

わが日本の国が、代々の先人たちの命と思ひのつみ重ねで今日にまで至ってゐることをあらためて知らしめられた。なぜ古きことを学ぶのか。言はずもながらのことであるが、より力づくよく明日に向ふ活力を得るためである。

国の誇りは過去を知ることから湧き出てくるものである。

先人のお蔭で今日がある。先人の努力の積み重ねの大きさを実感する。といふところから、日々の行ひが正されるものと思つた。

男子学生班と若者と一緒に勉強できたが、そこから学ぶものもあつた。一途に求めることの実践を忘れてはならないと



創作短歌全体批評。国民文化研究会副理事長 澤部壽孫氏は、自分の気持ちを正確に述べようと努めることは相手の話を正確に聴くといふことの実践でもあると強調。参加者の創作した一つ一つの作品について、作者の気持ちに寄り添ひながら、より適切な表現に手直しした結果を示し解説した。

自らを鞭打った次第である。

若きらの求める姿を羨しとも思ひつつ胸に鞭を打つなり

今後の国文研事業（当面）にあり方について

一、合宿教室

（元 東急建設（株） 奥富修一）

西日本合宿の運営の实情は知り得てをりませんが、継続開催が困難なら運営実務能力のある東京で一ヶ所開催が良いと思ふ。（運営実務態勢が可能なら関西開催も可）。会員三十名、学生二十名の五十名目標でも可。

二、年間を通じての研修事業として国文研事業をとらへる。

東京事務所での例会研修に力を入れて新たな仲間を増やしていく。最近の参加者数は月平均三十名強、年間四百名に達してゐる。国民文化講座参加者も含め、全ての研修参加者は五百名以上になつてをり、対外的にはこの数をレポートの上で発信したらどうか。「日本への回帰」を合宿教室の報告書ではなく、年間を通じての研修事業報告書として体制を整へる。又、合宿終了礼状にも一年の歩みの概略を盛り込んでの報告として体裁を整へたらどうか、と思ふ。

課題としては、東京の例会の充実をいかにするか、アナウンスをいかにして人員を増やしていくか。まづは会員の参加者を増やすことから始めていくことか、とも思ひます。

「共に是れ凡夫のみ」のお言葉

（山梨大学名誉教授 前田秀一郎）

二日目の原川猛雄先生の御講義は、聖徳太子憲法十七条を中心に太子の御言葉をわかり易く説かれたが、特に「共に是れ凡夫のみ」といふお言葉が皆の心に残り、班別研修でも深く議論された。小柳雄平さんの短歌導入講義は、短歌を詠む意義は豊かな心を育てることにあると得心した体験を話されたもので皆の共感を呼んだ。青山直幸兄の御講義は、わが国は天皇のしらす国であるといふ事実を、孝明天皇、明治天皇、昭和天皇の御事績、御宸翰や御製を通して明確にされ、深い感銘を与へて下さった。短歌創作、全体批評、班別相互批評は、極めて大切であり、短歌をより良くする過程を通して、物の見方や感じ方を深めることができたと思ふ。このためにも相互批評における指導者の存在は不可欠である。池松伸典さんの講話は、自らの体験を率直に述べられ、若い参加者の共感を呼ぶものであったと思ふ。

青山直幸兄の御講義を拝聴す

天皇のしらしし国の国柄を心をこめて語り給へり

朝の集ひ

富士が峯を背に空高くひるがへる日の丸の旗皆と仰ぎつ

講義を真剣に受けとめようとする姿

（寺子屋石塾主宰 岩越豊雄）

フリーといふ立場で女子班に参加させて頂きました。皆さんの講義を真剣に受けとめ学び生かさうとする姿勢に感銘しました。教員を希望する班員も何人かを、日本の国柄のすばらしさを涙ながらに語るその志に心打られました。

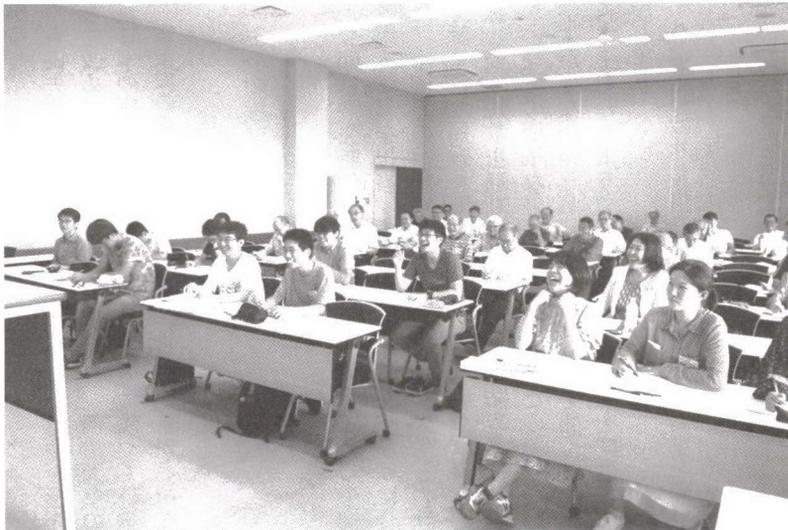
全体感想発表も皆すばらしく、日本の将来のためにも、このやうな志ある青年が増えることの大切さを痛感致しました。このやうなすばらしい合宿でありながら、参加する学生青年の参加者数が少ないことを残念に思いました。来年はしっかりと努力しようと思ひました。

運営上の問題、最後の講義は今までのやうに合宿のまとめとし、最後に折角出会った班員との今後の活動と連携を図るために、班別の時間を取ってほしいと思ひました。今後この学びをどう広めていくかが大きな課題です。

広き富士の裾野が宿で皆と共に国旗に向ひ君が代歌を
日本に生きてゐるのが幸せと語りたまへる女性すばらしき
子供らに国柄のよき伝へんと涙ながらに語る女性はも

国文研の文化・歴史観、自信持つて広めて

（元川崎重工工業株） 山本博資



カメラ・レポート 12

創作短歌全体批評。参加者の作品に講評が加へられ、対象を正確に詠むとはどういふことか、適切な言葉をさがすとは如何なることなのかが具体的に示された。さまざまな歌の情景が浮び上がると、思はず笑いが起こる場面もあった。

江崎道朗先生の講義を聴きて

先人の叡智を学べと師の君(※)のみ言葉しるべに励み給ひき
(※小柳陽太郎先生のこと)

若きとき学びの集ひ(※)で得しことは「正しく話を聞く」と
のたまふ(※合宿教室のこと)

繰りかへしなほ繰りかへし若きらに学んでほしいと説き給ひ
けり

富士を仰ぐ

富士が嶺を裾野に來り仰ぐときいよよ氣高き山にぞありける
晴れわたる富士の高嶺の白雲は見る見るうちにかたちをかふ
る

運営委員長はじめ合宿教室全体を取りまとめた諸氏に謝意
を申し上げます。事故もなく無事成功裡に終了したことを喜
びたいと思ひます。

自信と誇りをもつて国文研の日本文化・歴史観を広く知ら
しめることにさらに注力し参加者の増加につなげてもらひた
いと思ふものです。若き会員諸氏のアイデアを期待するもの
です。

国柄を形作つた皇室と和歌

(アサヒ飲料株) 澤部和道

今回、数年振りの合宿参加となつた。小柳雄平君の短歌導
入講義、青山直幸先生の御講義をお聴きすることができ、良

かつた。

青山先生のお話では、皇室と和歌が国柄を形作つてきたこ
とを改めて教えて頂いた。孝明天皇、明治天皇の父子による
新日本の建設のくだりが、特に印象に残っている。

富士山の麓の空澄澄みわたり夜道歩くもいと清々し

小柳雄平兄の講義を拝聴

(株)GSユアサ 高木雅史

今回は学生時代に共に勉強した仲間である小柳雄平兄が短
歌導入講義を担当するとのこと、三年ぶりに合宿に参加し
た。小柳兄の短歌導入講義は、岸本弘先生との歌の交換の中
で詠まれた短歌を題材として使っており、日常の中で短歌を
詠む姿、短歌を通じて自分の心を見詰める様子やお二人の温
かい交流の様子が学生に伝わったのではないかと思う。
学生が少なかつたが、全体感想発表を聞くと感銘を受けてい
る学生もいるようで、これからも勉強を続けてくれればよい
なと思う。

合宿が終はりし後も若きらが集ひて学ぶ事を願はん

人の話を正確に聴く大切さ学んだ

(神奈川県立小田原城北工業高等学校教諭) 中村正和

今回の一歩の衝撃は、日本の危機を最前線から分析して語

る「日本のために戦っている江崎道朗先生の姿」であり、先生の説く「人の話を正確に聴く」ことの大切さでありました。

國武忠彦先生の講話では、『古事記』の世界に入り込み、共感共鳴する日本のこころとその「あはれ」に深く感動を覚え、また、原川猛雄先生の講話では、私たちはともに凡夫であり、それ故に、相手の言うことを良く聴き、立場の違いを乗り越えて行かねばならないという、聖徳太子の御言葉の深き思いとその志に触れることができました。

久しぶりの参加にもかかわらず、先輩諸氏に心温かく迎えていただき、国文研の有難さが身に染みるとともに、今、ここから新たに生き直そうと決意する合宿となり、感謝です。

魁隊偵察員として爆砕戦死された

松吉正資氏の御歌に触れて

ふるさとの人のなさを抱きつつ散りにし君をわれ忘れめや

本部・事務局・指揮班

日々の学問を進めていくことの大切さ

(若築建築(株) 池松伸典)

あつといふ間の二泊三日であった。講師の先生方のお話は何れも感動させられた。この感動を心に焼きつけて今後の人生を過ごしていきたい。合宿に参加すれば改めて、この合宿



講話。池松伸典合宿運営委員長(若築建設(株))は「亡き師の言葉」と題して、国文研に連なる先人の言葉を引いて語った。忙しさにかまけ、心の生長をなくしてゐないか、真の心の交流の経験が少ないのではないかと問ひ掛け、「この合宿での学びから、学問のあり方がいかに大事なのかを心に刻んでほしい」と語り掛けた。

教室の大切さが感じられてくる。また江崎道朗先生のお話を聞きながら、日々の学問を進めていくことの大切さを知った。新たな学生を見出し、この道統をつないでいくことが、大きな課題として目の前にある。先生方が、御苦労されながら引き継いでこられたあとを微力ながらつづけていきたい。

富士の嶺の雄々しき姿ながめつつ学びの集ひふりかへりみる

原川猛雄さんのお話に初心問はれた思ひ

(I B J L 東芝リース(株) 小柳志乃夫)

よい合宿でした。各講義が充実し、池松伸典運営委員長の最後の講話も有難かった。又、何より全体感想自由発表で各々に心のこもる話うれしく聞きました。青年協議会の諸君の言葉が、以前と随分変わってある印象を受けました。澤部壽孫先輩の短歌指導の影響もその一つの背景ではないかと勝手に想像してをります。

自分自身としては、原川猛雄さんのお話に学ぶところ多くありました。初心が問はれた思ひです。

相互批評に第二班に入りましたが、前田秀一郎先輩の批評を始めてお聞きし、大いに学ぶところがありました。無駄を、また概括的な用語を取り除く作業の中に真実を見出していくものでした。

原川猛雄先輩ご講義

飾らざる人柄のままに語ります太子のご講義楽しく聴きゆく

凡夫のままに共に生きゆく広き道を強き言葉に説きたまひけり

最終日

青空の広がりが今日富士の嶺の大きさを仰ぎ見るかな
畏怖の情を覚ゆるといふわが甥の言葉思はるみ山仰ぎて

素晴らしい講義を少しでも多くの人に

(IMSグループ本部事務局 最知浩一)

二泊三日の夏合宿を終へて感じるの、やはり日程的に短かった合宿という印象が強かった。初日の開会式から始まり江崎道朗先生の導入講義と國武忠彦先生の古典講義。翌日の原川猛雄先生の聖徳太子のご講義と午後からの短歌導入講義、短歌創作、更に夜の青山直幸先生のご講義と二日目も盛沢山の内容だった。事前に日程は把握してゐたもの、やはり行つてみるとあつといふまに最終日を迎へ閉会式を行つたといふのが正直な感想だ。

それぞれのご講義はどれも素晴らしいものだったが、初めてお聞きした江崎先生の「日米同盟の行方と中国への姿勢」の講義は衝撃を受けながらお聞きした。私が普段新聞やテレビ報道で見聞きする外交情勢や認識と実際に繰り広げられてゐる日米、日中外交があまりにもずれて伝はつてゐることに驚きを感じた。そして、安倍政権や与党議員、霞が関の高級

官僚達に日本の外交の在り方や真の日本の国益を真剣に説かれ、今も精力的に活動されてゐる先生のご努力と実行力に胸が熱くなるご講義だった。もし東日本大震災後もあのまま民主党はじめ野党が政権を維持してゐたら日本はどうなつてゐたのだらう。トランプ大統領ではなくクリントン大統領が当選してゐたら世界情勢は、はたまた北朝鮮はどう暴走してゐたのだらうかと想像しながらお話を伺つた。

今回指揮班を担当させていただいたが、やはり参加者のここ数年の激減は寂しいものを感じた。「全国学生青年合宿教室」と銘打ちながら実際は男女ともに参加者は高齢化しており、一般学生及び社会人の参加は数名に過ぎなかつた。合宿中の諸準備や事務処理はこれまでになく楽ではあつたが、会の存在意義と今後の存続を考へると深刻な問題だ。多くの素晴らしいご講義と合宿での感動を一人でも多くの若い方々に伝える方途をもう一度皆で叡知をしぼらなければならぬと感じた合宿でもあつた。

合宿最終日の早朝に集ひの広場にて

さしのぼるあさひに映えてそそりたつ富士の高嶺のなんと
雄々しき

いただきにかかりてありし雲もはれ雄々しき姿に言葉も出で
ず

敵かに聳ゆる姿を真向かひに見ればこころの清しかりけり

カメラ・レポート 14



全体感想自由発表 「合宿で生きる力を貰った。日本に生れた幸せを感じた」「正確に聞くことの大切さを教へられた」「父・孝明帝を十六歳で喪くして皇位を踐まれた若き明治天皇の『御決意、を知った』『五箇条の御誓文』の深い意味合ひを知って良かった」「言葉では知ってゐたが『うしはく』と『しらす』の相違の深意を実感できた」「教員を志望してゐるが、日本に生れた幸せを感じさせられる先生になりたい」「短歌の相互批評で、自分の気持ちにびつたり表現にたどり着いた時はすっきりした」

参加の皆様に感謝したい

(元(株)アルバック 北濱 道)

講義は、各講師の日頃の人生と研鑽と入念な準備を偲ばせる、そしてお人柄の滲み出る素晴らしいものであった。

今回私は合宿運営、進行の、所謂裏方の一翼を担ったが、慣れないせいも、人手不足のためか、複数の人から同時に別の用事を頼まれ、手が回らないことが幾度かあった。参加者の皆様には説明が至らずご迷惑をお掛けした面も多々あったやうに思ふ。それでも今回、大過なく合宿研修を遂行することができたのは、合宿に参加された皆さんに合宿に対する基本的なご理解があり、目に見えないあたたかい気持ちといふご支援をいただいでゐたからではないかと思ふ。参加の皆様に感謝したい。

閉会式

人々のかしこき思ひに支へられ合宿教室今終らむとする

心を働かせること

(茨城新聞社 佐川友二)

最後の感想発表で、七人の学生が登壇し、合宿教室での体験を披瀝してくれた。司会のマイクを手に、彼ら一人一人が前に出て語る言葉と表情に接しながら、講師の先生方が、そ

れぞれの御講義に込めて伝へようと思はれたことが、若い人にしっかり把握されたのだと感じた。それは、「心を働かせる」ことの大切さに気付くことであり、人の思ひに心を寄せ、自らも真剣に自分の思ひを伝へようと努めること、すなはち、人としっかりとした交はりを結ぶ人生態度を持たうといふ呼び掛けであったと思ふ。

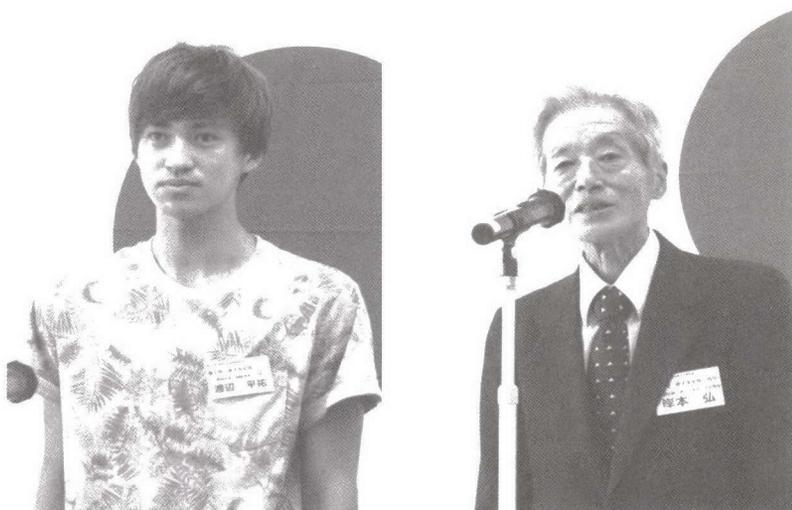
江崎道朗先生の御講義では、小柳陽太郎先生との出会ひを語られたくだりが特に心に残った。原川猛雄先生が緋かれた聖徳太子の御言葉、國武忠彦先生が語られた宣長と古事記、青山直幸先生に導かれて味はった歴代天皇の御製を通して、長い歴史を積み重ねてきたわが国には、参照できる立派な先人たちの足跡が、実に豊かにあることに気付かされた。

私自身のこの合宿教室への参加は、学生の時から数えて七回目になった。今回、初めて運営委員として関はる機会をいただき有り難く思った。合宿中は、運営委員長の池松伸典さんをはじめ、諸先輩方の真心を込めて任務に当たられる姿勢、責任を果たさうとされる真摯な態度に学ばせていただいた。

学生の感想発表を聴きて

合宿で得しこと各々真心を込めて語らんとする姿尊し

我もまた直き心を忘れじと交はりの縁かみしめ思ふ



閉会式。主催者を代表して岸本弘氏（元 富山県立富山工業高等学校教諭、本会会員）（右）があいさつし、「班別研修の中での体験は、生活のどの場にあっても大切な人と人の付き合い方だと思ふ」と述べた。信州大学繊維学部一年、渡辺平祐君（左）の閉会宣言を以て「合宿教室（東日本）」は幕を閉じた。

合宿中に創作された『短歌詠草』

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、忘れたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の小柳雄平氏（伊佐ホームズ（株））により短歌創作導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会副理事長の澤部壽孫氏（元 日商岩井（株）エネルギー本部副本部長）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた講評の中で作者の一語一語に含まれる心を偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寢食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品

(別冊相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。)

第一班

元 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘

小柳雄平さんの短歌導入講義

慕はしきわが若き友はなつかしき思ひ出こめて今語りゆく

飾りなく言葉を扱ひ語りゆく君が講義に耳傾くる

班別研修 (男子学生一班)

清々しくひびき来るなり若きらのつつまず

語ることば言葉は

「分からず」と問へば直ちに「かく思ふ」と応へる言葉もあたたかきかな

散策

栗手に野に咲く花の名をたづね友らと野辺をたどりつつ行く

仙人草萩野アザミも紅き実の辛夷こがしも知りて

樂しかりけり

(株) IHIエアロスペース 内海勝彦

レクレーションにて

コブシの木あるとふ声に近寄れば群がりな

れる小さき実の見ゆ

幼子の握るこぶしに見立しとふ形を見れば

いと愛らしき

わづかの間晴れし青空背にうけて実りし赤

の輝くことし

Chaterhouse School 三年 柏原永明

御殿場に来れど今日も雲晴れず富士の高嶺

は姿をみせず

東京大学 教養 一年 江上隆介

上手き歌をと思はざれどもふさはしき言葉

出で来ず詠み難きかな

信州大学 繊維 一年 渡辺平祐

紅色のコブシの堅き実をとれば奇しき形に

力を覚ゆ

明治大学 政経 四年 江崎光太郎

一粒の露のる薄き花びらの青さしるけし日

の射し来れば

佐賀大学 文化教育 四年 藤近晃久

江崎光太郎君へ

撮りて来しキノコ見せつつ「桃みたい」「ク

ラゲみたい」と笑へる君は

(伊佐ホームズ(株) 小柳雄平)

夏合宿穴井宏明兄・高木雅史兄

「おお」と言へば「おお」と応へし友どち

は我が講義をば聞きに来しとふ

懐かしき友と語れば講義前の緊張ほぐれゆく心地すも

第二班

福岡教育大学 教 四年 堤 正史

地を覆ふ苔の中にも一輪の白く小さき花の

咲きたり

皇学館大学 文 三年 小野寺崇良

柴垣を覆ひて花咲く蔓草のたくましささま

に心惹かるる

佐賀大学 理工 一年 衛藤良太

顔寄せて紫の花見つめたり張る蜘蛛の巣に

気づかぬままに

緑濃き草むらの中ひと本のツルリンドウは

真直ぐに立てり

全日本学生文化会議 清川信彦

散策の休憩中に

ひとときの雨はあがりて窓の外とのいちやうの青葉ひに輝けり

埼玉県庁企業立地課 飯島隆史
輪になりてはじめて会ひし友どちと語り交すは樂しかりけり

富士の峰姿はみせず雲低く雨まじりにてひながし東に飛ぶ

筑波大学非常勤講師 布瀬雅義

朝の短歌鑑賞にて
七十年の時を経つれどますらをの思ひのひななそとたに胸に迫り来

第三班

元三菱重工工業(株) 島津正数

江崎道朗先生の御講義を聴きて詠める
先人の残せし文を究めむと手写しせしと師は述べ給ふ

正確に理解をせむと本二冊写せし気概に心打たるる

レクリエーションにて詠める

班員と秋の野花を捜しつ共に歩めるとき
樂しかりけり

ツユクサの一輪の花さがしえて心うれしく
写し絵にとる

三菱地所(株) 都市開発第二部 青山直幸

江崎道朗先生の御話を聞きて

小柳陽太郎先生と山田輝彦先生を偲ぶ
御二人の師との出会ひのおかげにて今の自分はあるとのたまふ

古典には素晴らしき叡智込められしとふ師のみ言葉を糧としたまふ

向ひたる相手の言葉を正確に聞くに努めよとの厳しきみ言葉

その道を究めたる人と交はれば力ちからつかむと励ましたまふ

福岡教育大学 教 二年 中島朋子

名古屋駅にて

長崎の先輩方とガラスごしに目のあへばバツと嬉しさあふるる

合宿の受付の折に
顔かんほにあふるるほどの笑み浮かべ迎へてくれし澤部先生のをりたまふ

江崎道朗先生のご講義を受けて
いかならむときにあふとも正確に言葉受け止めひたに生きなむ

班別の質疑応答の折の

江崎道朗先生のことを

焦らずにしかもたはまず少しづつ学べばよ

きと師はのたまひぬ

國武忠彦先生のご講義を受けてあ

うるはしき大和言葉の伝はれる国に生れたる喜び感ず

長崎大学 教 四年 津田真木

ツルリンドウいづこにありやと探し求め友らと歩めば足取り弾む

道の辺にひそと咲きたる花見ればはかなきなかに強さ感ずる

色形ありのままにて飾らざる花の姿をしはし見つむる

一人では花に目をやるのみなれど皆で見つむる花なほ麗し

発さずもひっそりと咲く花々に目を向くる皆の表情優し

長崎大学 教 四年 桑原由夏

江崎道朗先生のご講義を受けて
「食らひつく」気持ち忘れず日の本の行く末見据みまふ字ひ続けむ

静岡に富士仰がむと来れども雲に覆はれ御姿見へずけしき

富士山の全景を見るは叶はねど広がる麓に雄々しさ感ず

散策の折

愛らしき秋の花々探しつつ仲間と語りて歩むはたのし

見上ぐれば雲の切れ間ゆ青々と澄みわたる空のまぶしきのぞく

奈良県明日香村議会議員 柳谷信子
富士山の麓の散策にて

赤き実のこぶしをみつけ古への人の心をしのぶよるこび

(公財) 郷学研修所・安岡正篤記念館
嶋田元子

江崎道朗先生の御講義を聞きて
師の君へのあふるる思ひを聞きをれば在り

またほし日の御姿浮かぶ
側に師のいますぐに語りゆく講師の話に心打たるる

野々村悦子

雲ながれ青空見ゆるつかの間に富士の山肌しるけくも見ゆ

日本生命保険相互会社 野々村美紀子
國武忠彦先生の御講義後の班別研修にて

学問に対する思ひを語りあふ友らの姿に胸をうたたるる

第四班

元 株講談社 藤井 貢

秋の野に群れ咲き匂ふ山萩を友に教はり心に止めむ

元 私立高校副校長 永井敏勝
防人の歌を残せしみおやらの直き心をしのびゆきたし

(一社) 日本港運協会 久米秀俊

楽しみにせし散策の近づけば願ひかなひて雨のやみたり

元 座間市立中原小学校教諭 松本洋治
雨音に目覚むる朝富士合宿窓の外暗きに木の葉ゆれる見ゆ

小雨降り風も吹く中散策を思ひ定めて庭にいでゆく

人もなく富士は雲かかり姿見えす静寂の中風音を聞く

日本大学名誉教授 夜久竹夫

御殿場にて富士山を望みて
雲切れて黒き山腹迫り来る雄々しき姿に心はをどる

合宿に参加して

ひたひたと内と外から迫り来る災ひに勝つ心を育てむ

元 富士通(株) 古賀 智

晴れぬかとあきらめをれば雲切れて森のこずゑに雫かがやく

元 神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄
江崎道朗先生のご講義を聞き

他人語る思ひに耳をかたむけし大人の姿のたふたく見ゆる

考への違ひをこえて人々と心通はずみ姿たふと

第五班

国文研の集むに向けて

御殿場線の窓外に映りたる
思はずも窓の外に見ゆ虹の橋我を迎へるこ
とく輝く

渡辺裕子

交流の家の周りを散策して
珍らしき小さき蝶の舞ふを見て名を問ひた
だしつづつ友らと歩む

池田秀子

富士の野に咲き乱れたる草花にけなげに生きる姿を学ぶ

友と見る虹の根元の山裾の学びの館想ひつ

浜崎祥江

つ行く

雨に打たれ富士の裾野に秋草のけなげに咲
けば命かがやく

秋草求めて散策

谷藤伸子

春に食むいたどりの花今咲きて母が作りし
山菜想ふ

関口靖枝

歌詠まむと心凝らせど時は過ぎくぐもるま
まにわれ帰りゆく

坂本民子

すゝき立つ富士の裾野の学舎に若きらと集
ひ我は若やく

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 今林賢郁

止みたると思へばふたび小雨降り寒さ覚
ゆる合宿の地に

時の間に青空見えて雨雲は這ふが如くに流
れゆくなり

ひとすぢの光射しきて雲流れ富士の高嶺の
裾野見えくる

(二回目の作品)

合宿最終日の朝

雨雲は流れてみ空青くして富士の頂あらは
れにけり

吹く風に誘はれはためく日の丸のかなたに
富士を仰ぎ見るかな

元 日商岩井㈱ エネルギー本部副本部長

澤部壽係

友 (九月八日)

合宿に縁を得たる友らとの交はり五十余
年経にけり

友らとの固ききつなのあればこそ誤れる思
想とたたかひ生きる

会はずとも歌詠み交はし限りあるいのち通
はせ生きつらぬかむ

元拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内健生

「北鎌倉輪説云」の人々、合宿に集ひぬ

鎌倉のつどひの人々いくたりもみ顔を見せ
しがうれしかりけり

八人もの学びの仲間の加はりてともに歌詠
むがうれしかりけり

時をつくり御殿場の地まで運びたまふ心な
うれしくありがたきかな

雨もよひの短歌創作

はるるかと思へばにはかに降り来たる洋傘
もちて歩む歌づくり

降る雨のたちまちに揚りて見あぐれば雲間
にお日様姿を見せたり

さし来たる陽さしの暑さは夏の日の名残り
なるかなつかの間にして

またしても雨降り来れど吹ききたる風の涼
しく心地よきかな

原川猛雄兄の講義の司会を担当して

常日頃のみ心がけのしのばるる太子の御講
義つつしみて聞く

諄々と語りゆくがに説き進む君が横顔間近
く目にする

元 東急建設(株) 奥富修一

繁りたるヤマボウシの葉に雨降りて赤き実
しるく目に見ゆるかな

夏草の可憐な花の蜜を吸ふ小さき蝶は羽
すり合す

元(株) 柴田代表取締役 柴田悋輔

御殿場に秋草を探しつ
雲動き富士も裾野をあらはしぬ薄陽もさし
て緑草しるけく

語りつつ友ら晴れ間に散り行けり木々をゆ
らせる風の合ひ間に

山梨大学名誉教授 前田秀一郎

班別研修で聖徳太子の憲法十七条を読む

憲法の御言を明らかにむと友みな思ひの
まま語りゆく

思ふまま語れる友の言の葉に聖徳王の御
教へ偲ぶ

皆人にたやすき例ひき給ひ人の踏むべき
道説かれたり

寺子屋石塾主宰 岩越豊雄

石段のすき間にノアザミ生ひいでて紫の花
咲きいでにけり

万葉集で一番多く歌はれし山萩の花見つけ
てうれし

葛の花吹きしだかれて色新しと歌ひし
空の歌思ひ出す

草むらにたつた一本紫のツルリンドウの花
見つけたり

野の花をかざし歩けばさまさまな花咲きた
るを見つけて驚く

(株) オートバックスセブン 小田村初男

富士の野に草花探し巡りてはツルリンドウ
の可憐なる見ゆ

元川崎重工業(株) 山本博資

理事長の開会挨拶を聴きて

わが国の歴史文化を良く知って学ぶは我ら
が務めなりてふ

若さらに道のしるべに古の典を学べと語
り給ひき

國武忠彦先生の講義

「日本のこころ『古事記』を聴きて

「古への正実」を伝ふる古事の記を学ぶは
樂しかりけり

「いささかもさかしら加へず古ゆ伝へたる
まま」記せし宣長

上つ代の日本言辭を伝へたる古事記を友ら
と学ぶ

アサヒ飲料(株) 澤部和道

四歳になる長男を幼稚園に

迎へに行つた折

いつの間にか友達もでき友達と笑い戯れる
吾子を見るは嬉しき

(株) GSユアサ 高木雅史

ひたむきに脚本の道進みたる友功なると聞
きて嬉しや

運営本部

若築建設(株) 池松伸典

澤部壽孫大兄の短歌鑑賞

「ふるさとの人のなさけ」と御歌読む先輩
のみ声の心に響くも

亡き学徒の清きまことの伝はりて涙こぼる
る先輩のみ声に

IBJL東芝リース(株) 小柳志乃夫

澤部壽孫先輩の短歌紹介を聞きて

若さらに詠みきかせます先輩の御声絶えに
き御胸あふれて

はらからの情け忘れじとみいくさに命さゝ
げしみ歌かなしも

最知浩一指揮班長

大雨の予報続くを奇しくも雲はれてゆく君
が願ひに

國武忠彦先輩の講義

学問の喜びあふるる先輩のお話ともしく耳
傾けつ

長き日をうまずたゆまず学はれし足跡偲び
つつ講義を聴く

江上隆介君

合宿に来て楽しとふ若き友の声をしきけば
うれしかりけり

元(株) アルバック 北濱 道

小柳雄平君の短歌創作導入講義

志貴皇子の御歌を読みゆきさわらびの「よ

の美しき響き示しぬ
先輩の導きを得て自らの心を見つむる営み
続けしと

茨城新聞社 佐川友一

合宿レクリエーション、雨の池の金魚

雨脚のにはかに強まり水面みなも乱れ水中の映像
かき消えにけり

指揮班

I M Sグループ本部事務局 最知浩一

無事レクリエーションを

行ふことが出来て

吾の願ひ天に届きしかいつのまに雨も降り
止み青空も見ゆ

事務局

国民文化研究会事務局長 磯貝保博

雨風の吹きつくる音強まりて眠りも浅く朝
を迎へり

時折りに雨やみたればこの後は晴のちにかは
れと願ふしばしば

あとがき

師走に入り、寒さがひとしほ身に染みる時節となりました。皆様にはその後如何お過ごしでしょうか。

福岡県篠栗町「福岡県立社会教育総合センター」、静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」で共に学び合った「合宿教室」から四ヶ月を経て、この度やうやく、この「感想文集」を皆様のお手元にお届けできる運びとなりました。

この文集は、「合宿教室」の最後に、参加者全員に走り書きしていただいた感想文と、それぞれが合宿中に創作した短歌を合はせて収録したものです。

編集作業は、各班の班長に、班員の感想文と短歌を添削・編集していただく作業から始まりました。参加者お一人お一人の心がこもった文章と歌を丹念に読み返し、文字を正確にたどる編集作業は、神経を使ひ、時間を要しましたが、それぞれの瑞々しい心の動きに触れる喜びを感じることができ、作業に携はる者には得難い貴重なひと時でありました。

本感想文集の編集に際しましては、以下の方針で作業に当たりました。

一 「感想文」

執筆者の原文を尊重し、お心の内が最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題を付けました。文意が不明瞭な場合は、執筆者の気持ちや想像しながら、原文の趣が損なはれないやう加筆しました。「仮名遣ひ」については、原文を尊重し、現代仮名遣ひ、歴史的仮名遣ひどちらかに統一してゐます。漢字および文法上の誤りは訂正してをります。

二 「短歌」

西日本、東日本の各合宿教室では、それぞれ二回短歌を作る機会を持ちました。一回目の創作は班別相互批評で手直ししたものを、「短歌詠草」に収めました。感想文執筆時の二回目の短歌は、基本的に感想文の末尾に載せてをります。文字表記は、すべて歴史的仮名遣ひにそろへ、文法上の誤りは、訂正してをります。

「感想文集」を作成する過程では、各班長以外にも、多くの皆さまのご協力をいただきました。特に、今回「合宿教室」が西東分れて開催されたことで、その西日本の分のまとめのすべてを元(株)アルバック北濱道氏に

担当していただきました。心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真は、西日本は医療法人豊司会 新門司病院の森田仁士さんとHubax(株)の岡部智哉さんに、東日本は北濱道さんとIMSグループ本部最知浩一さんにお世話になりました。

皆様には、心尽くしで出来上がったこの文集をご精読下さい。読み進むにつれて、様々な感動が甦ってくるでせう。読後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合つて学んでゆくことができれば幸いです。(佐川友一記)

第六十三回「合宿教室」(西日本・東日本)感想文集

非売品

平成三十年十二月二十五日発行

編集兼発行者

公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今林賢郁

編集 佐川友一・北濱道

東京都渋谷区東一十三一―四〇二号

〒一五〇―〇〇一一

電話 〇三―五四六八―六二三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

